岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集

平成27年度発掘調査報告書

サンニヤ遺跡　房の沢Ⅳ遺跡　白石遺跡

ほか調査概報（33遺跡）

２０１６

（公財）岩手県文化振興事業団

平成27年度発掘調査報告書

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成27年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で36遺跡、約17万㎡が調査され、縄文時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成28年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　菅　野　洋　樹

目　　次

平成27年度の調査結果について…… 1

Ⅰ　発掘調査報告

（1）サンニヤ遺跡（洋野町）…… 5
（2）房の沢Ⅳ遺跡（山田町）……19
（3）白石遺跡（大槌町）……37

Ⅱ　発掘調査概報

（4）中村遺跡（北上市）……43
（5）盆花遺跡（盛岡市）……44
（6）新里愛宕裏遺跡（遠野市）……45
（7）西平内Ⅰ遺跡（洋野町）……46
（8）北鹿糠遺跡（洋野町）……47
（9）南鹿糠Ⅰ遺跡（洋野町）……48
（10）上のマッカ遺跡（洋野町）……49
（11）中平遺跡（野田村）……50
（12）上泉沢遺跡（野田村）……51
（13）乙部野Ⅱ遺跡（宮古市）……52
（14）高根遺跡（宮古市）……53
（15）山口駒込Ⅰ遺跡（宮古市）…… 54
（16）青猿Ⅰ遺跡（宮古市）……55
（17）根井沢穴田Ⅳ遺跡（宮古市）…… 56
（18）荷竹日向Ⅰ遺跡（宮古市）……57
（19）荷竹日影Ⅱ遺跡（宮古市）……58
（20）石峠Ⅱ遺跡（山田町）……59
（21）間木戸Ⅰ遺跡（山田町）……60
（22）田屋遺跡（大槌町）……61
（23）小白浜遺跡（釜石市）……62
（24）袰帯遺跡（宮古市）……63
（25）重津部Ⅰ遺跡（宮古市）……64
（26）田鎖遺跡（宮古市）……65
（27）田鎖車堂前遺跡（宮古市）……66
（28）千鶏Ⅳ遺跡（宮古市）……67
（29）八幡沖遺跡（一関市）……68
（30）越田松長根Ⅰ遺跡（宮古市）……69
（31）赤前Ⅲ遺跡（宮古市）……70
（32）川半貝塚（山田町）……71
（33）クク井遺跡（山田町）……72
（34）赤浜Ⅱ遺跡（大槌町）……73
（35）西和野Ⅰ遺跡（陸前高田市）……74
（36）高田城跡（陸前高田市）……75

調査報告遺跡抄録……76

平成27年度発掘調査の概要について

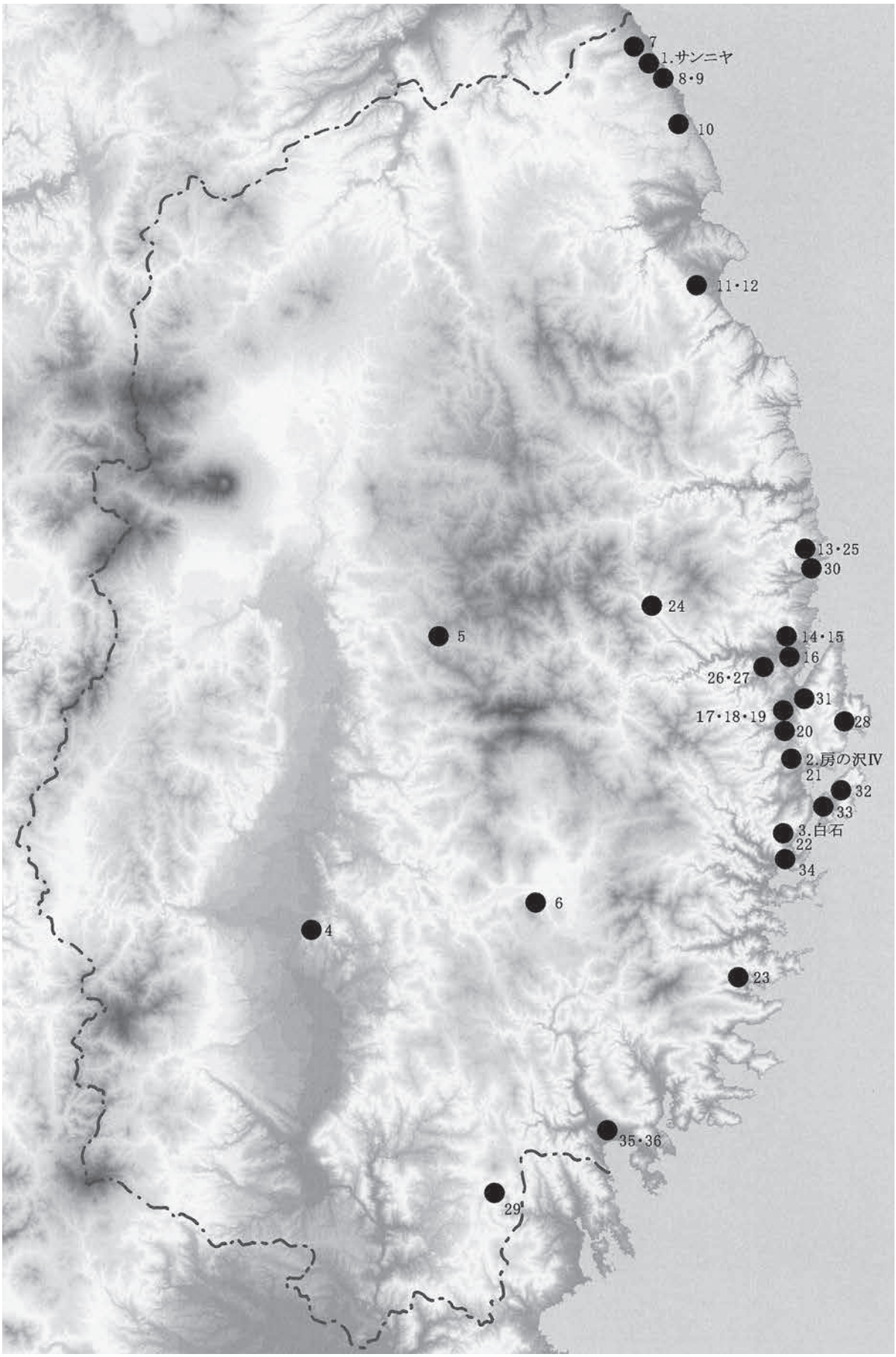
平成27年度の発掘調査は、当初36遺跡、184,474㎡で開始し、最終的には36遺跡、168,201㎡の発掘調査を実施した。調査遺跡は、沿岸部を中心に県内７市３町１村に所在しており、最終結果を前年度と比較すると遺跡数で８遺跡減、面積で7,312㎡減となっている。遺跡数・面積とも減少はしているが、震災復興関連調査については昨年度に引き続きピークを維持していたと考えられる。復興関連調査は、国土交通省の三陸沿岸道路建設や市町村の高台移転及び道路整備関連が中心であり、通常調査では内陸部の北上川河川改修事業に関連した調査等が行われた。

縄文時代の遺跡を古い順にあげると、まず、宮古市田老の越田松長根Ⅰ遺跡において、前期前葉の集落跡を確認した。残存状況の良い住居跡がまとまった該期の集落跡は少なく貴重な調査事例となった。前期の遺跡では、長軸15m前後のロングハウス群が検出された大槌町赤浜Ⅱ遺跡を始めとして、山田町ク久井遺跡・川半貝塚、宮古市田老の重津部Ⅰ遺跡で大型住居跡が見つかっている。赤浜Ⅱ遺跡では、長軸15m前後のロングハウスを主体とする前期の集落跡と、複式炉・石囲炉をもつ中期の集落跡が見つかっている。遺構の重複が激しいものの残存状況は良好であり、大型の磨製石斧や土偶などの出土品も豊富であった。

縄文中期では、山田町の間木戸Ⅰ遺跡・石峠Ⅱ遺跡、宮古市の高根遺跡で、長期間、竪穴住居の建て替えが繰り返されている状況を確認した。住居跡には直径・深さ２m前後のフラスコ状土坑が伴うのが特徴である。石峠Ⅱ遺跡では３箇年の調査で中期後半の竪穴住居跡110棟以上を検出したが、直径約８mの住居跡で石を装飾的に配置した複式炉が見つかっている。高根遺跡では、急峻な斜面に竪穴住居跡と大型のフラスコ状土坑が階段状に連なる集落跡が検出されている。間木戸Ⅰ遺跡では、前期末から中期末の竪穴住居跡93棟とフラスコ状土坑66基を検出した。３箇年の調査で250棟以上の縄文時代の住居跡が発見されており、該期における拠点的な集落であったと考えられる。縄文後期では、洋野町西平内Ⅰ遺跡で、昨年度検出された２つの石列からなる内帯と、46基の配石からなる外帯で構成される配石遺構群と関連遺構の調査を行った。配石周辺から竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、遺構外ながらヒスイ製垂飾品等が出土した。後期の集落跡では、宮古市田老の乙部野Ⅱ遺跡で50棟の竪穴住居跡を検出している。さらに、弥生初頭の竪穴住居跡３棟を検出し、住居跡から多くの完形の土器が出土した。

古代では、北上市中村遺跡で、竪穴住居跡34棟、掘立柱建物跡１棟、焼成遺構16基を検出した。焼成遺構は今年度も発見され通算で90基にのぼる。同じ地形面に立地する千苅遺跡の調査から通算すると、200棟を超える竪穴住居跡を確認したことになり、千苅遺跡・中村遺跡は北上川のほとりの大規模集落であることが判明した。野田村中平遺跡では、古代の竪穴住居跡群に隣接して、円形周溝と方形周溝が並ぶ形で検出された。陸前高田市の西和野Ⅰ遺跡でも方形周溝が見つかっている。継続調査である田鎖車堂前遺跡では、９世紀の古代集落跡と、12世紀と推定される幅５m、深さ２mの堀跡が発見された。堀跡は２つの屈曲部を検出しており、来年度の堀内部の調査により堀の性格も明らかになると考えられる。宮古市根井沢穴田Ⅳ遺跡では、残存状態の良い４基の製鉄炉跡を検出した。地下構造が明確で、鉄を溶かした時のノロの痕跡が明瞭に残っており、古代末から中世の製鉄炉の貴重な事例となった。中世～近世の遺跡では、継続調査の高田城跡で、曲輪Ⅳから曲輪や切岸・土塁を確認したが、曲輪Ⅲとされた箇所は近代以降の人工造成であることが判明した。一関市室根八幡沖遺跡では、大規模な堀跡２条と堀切・切岸が見つかり中世城館跡の所在が推定されている。

今年度も復興関連調査が主体ということもあり、沿岸北部の洋野町から南部の陸前高田市までの調査が行われた。各時代、各地域によりそれぞれ特色ある様相を呈しており、内陸部に比して調査事例の少なかった沿岸地域において、貴重な調査記録が蓄積された意義は大きいといえる。（調査課長　鎌田　勉）


7
1.サンニヤ
8・9
10
11・12
13・25
30
24
5
14・15
16
26・27
31
17・18・19
28
20
2.房の沢Ⅳ
21
32
33
3.白石
22
34
6
4
23
35・36
29

調査遺跡の位置

Ⅰ　発掘調査報告

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30㎝

中コンテナ：42×32×20㎝

小コンテナ：42×32×10㎝

（1）サンニヤ遺跡

所　在　地	九戸郡洋野町種市第25地割字サンニヤ	**遺跡コード・略号**	IF48-2118・SN-15
委　託　者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	**調査対象面積**	1,800㎡
事　業　名	三陸沿岸道路	**調査終了面積**	1,800㎡
発掘調査期間	平成27年10月５日～11月11日	**調 査 担 当 者**	村木　敬・野中裕貴

１　調査に至る経過

サンニヤ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（洋野～階上）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359㎞の自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年４月26日付け国東整陸―調第15号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年５月13日～14日にわたり試掘調査を行い、平成25年６月24日付け教生第509号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成27年４月10日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

種市・角浜　1：25,000

第１図　遺跡位置図

2　遺跡の位置と立地

遺跡は九戸郡洋野町種市第25地割に所在し、種市駅より西方約1.0㎞に位置している。太平洋へと蛇行しながら東流する川尻川へと張り出した段丘上に立地している。段丘は北向きの斜面で、標高を徐々に下げながら形成されており、遺跡は先端部より内陸部の標高約60ｍの緩斜面上にある。現況は山林である。旧地形はやや北西方向に尾根が走り、現況とは異なる様相を呈している。

遺跡の周辺では、当該事業などに伴い多くの調査が行われており、縄文時代前期の竪穴住居跡が検出されたゴッソー遺跡、配石遺構群が検出された西平内Ⅰ遺跡、陥し穴状遺構群が検出された平内Ⅱ遺跡・南川尻遺跡・下向遺跡がある。

3　基本層序

層序は調査区東壁ⅢＢ21グリッドでⅠ～Ⅳ層を確認できており、以下の通りである。遺構検出面はⅢ層下部からⅣ層上面である。

Ⅰ層：黒褐色土（10YR3/2）粘性弱、しまり弱。表土。

Ⅱ層：本層は２層に細分される。

ａ　黒色土（10YR2/1）粘性やや弱、しまり中。

ｂ　黒褐色土（10YR3/2）粘性やや弱、しまり中。

Ⅲ層：黒褐色～暗褐色土（10YR3/2～3/3）粘性やや弱、しまり中。

Ⅳ層：褐色土（10YR4/3）粘性やや弱、しまり強。ソフトローム層への漸移層である。本層以下は、ローム層が確認できている箇所で約２ｍ発達している。

4　調査の概要

（1）遺構

検出遺構は陥し穴状遺構20基である。各遺構の記載については一覧表にまとめてある。遺構は頭頂部からやや下がった緩斜面上、等高線に対して直交もしくは平行するように形成されている。平面形状は全て溝状である。規模は長軸2.5～4.3m、幅0.6～1.0m、深さ0.7～1.5ｍに収まる。短軸断面はＶ字形状とＹ字形状である。軸線方向は真北と東西方向をとるものに３分類される。堆積土では埋土下部にⅡａ層を主体とする黒色土が堆積しており、Ⅱｂ層堆積以降に形成されたものと捉えられる。

さらに、本遺構の配列を軸線方向から検討すると、遺構は２基一対で形成されているものと考えられる。この配列方向は等高線に対してやや直交から斜交させつつ、斜面において上下となる傾向がある。たとえ軸線方向が異なっていたとしても、この傾向に概ね変わりはない。

（2）遺物

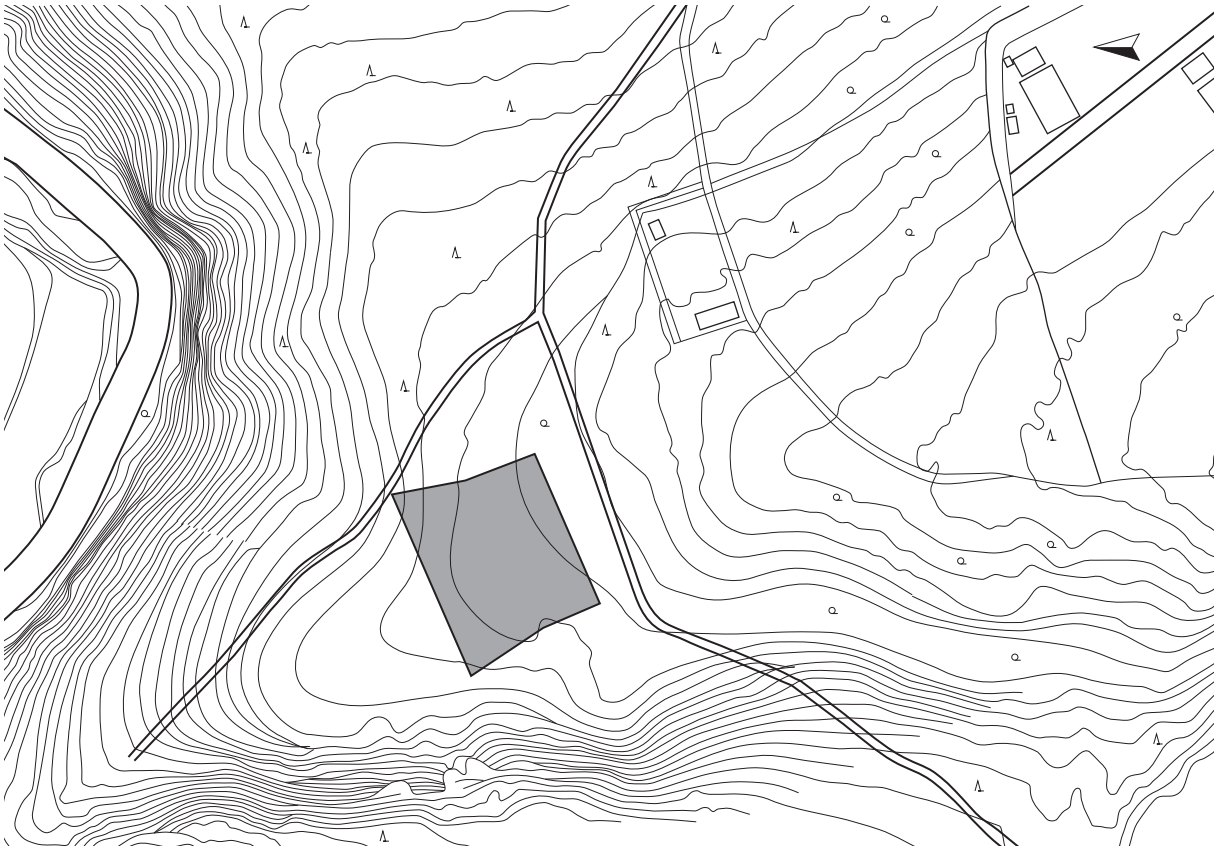
出土遺物は縄文土器98点である。これらはⅢＢ７グリッドを中心に出土している。文様が認められている１～４は、型式は判然としないものの、概ね後期初頭に属するものと考えられる。５～７は同一個体の粗製土器である。また、８・９は折り返し口縁の粗製土器である。これらも上述の土器と同様の時期に相当するものと思われる。

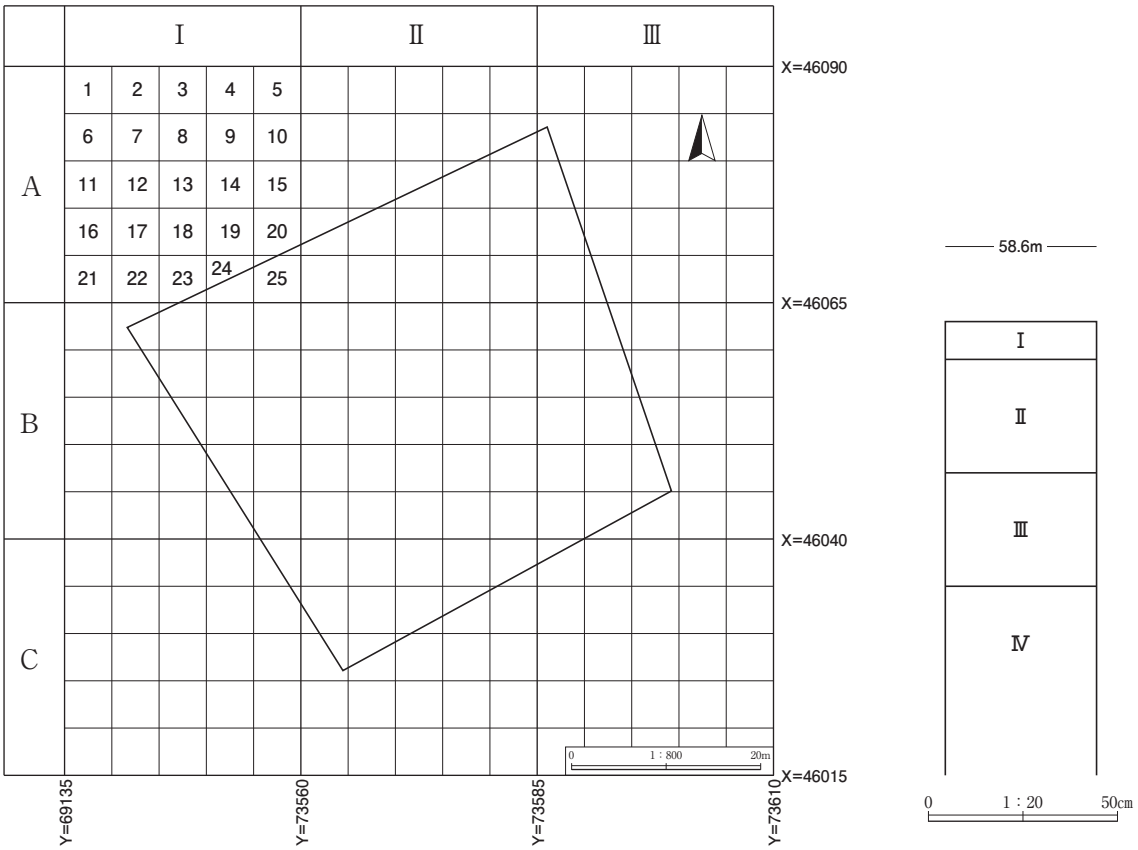
5　まとめ

本遺跡は段丘の頭頂部から下る緩斜面上に形成された縄文時代の狩猟場である。出土遺物と堆積層序、当該形状の陥し穴状遺構の所属時期から検討すると、中期以降に形成されたものと想定される。

洋野町の遺跡では北向きの緩斜面にこのような狩猟場が形成されている事例を確認できていることから、本遺跡もその様相に合致している。また、縄文土器が僅かながら出土していることから、周辺には竪穴住居跡を構成する遺構が存在するものと推測される。

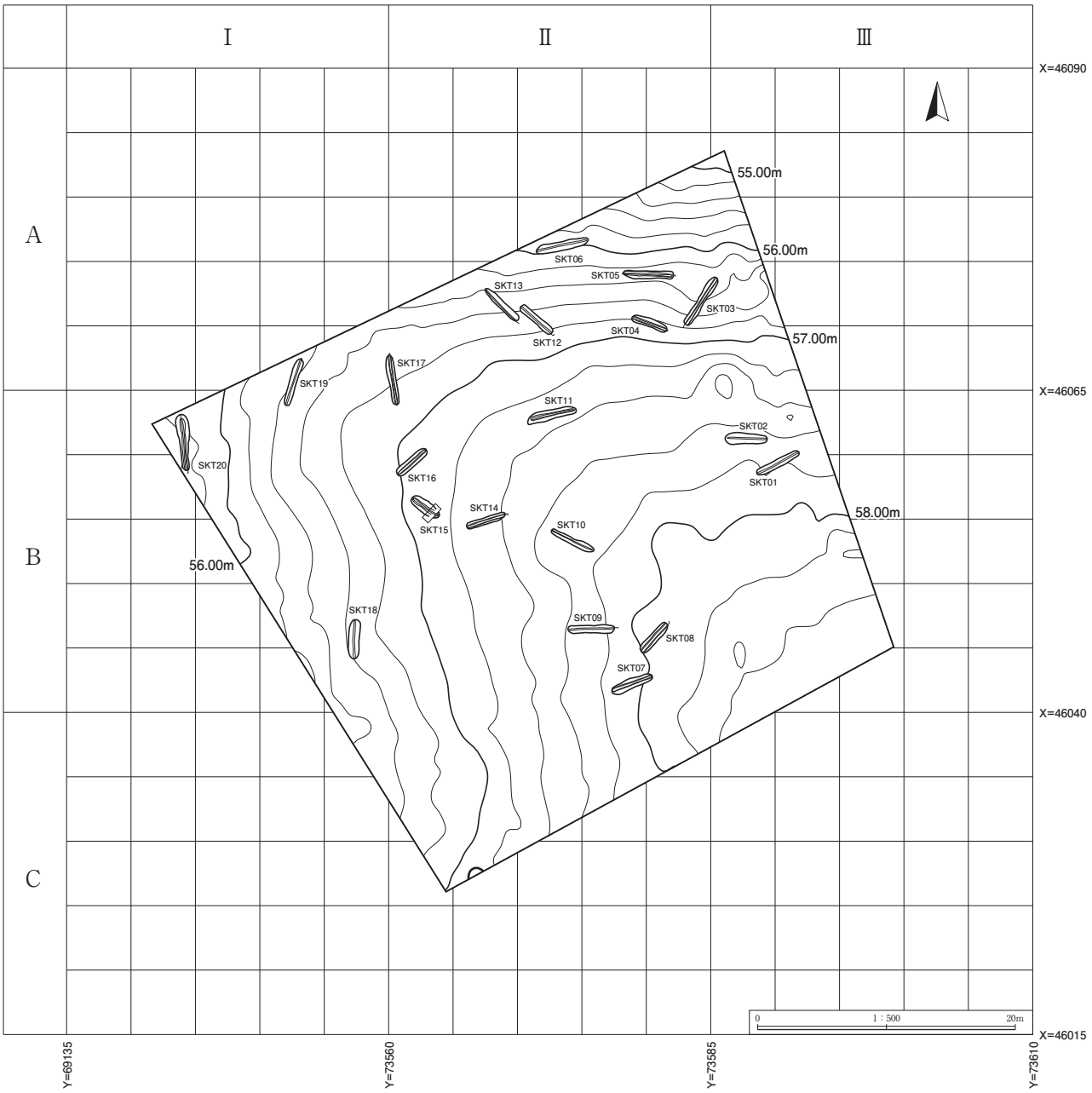
なお、サンニヤ遺跡平成27年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。





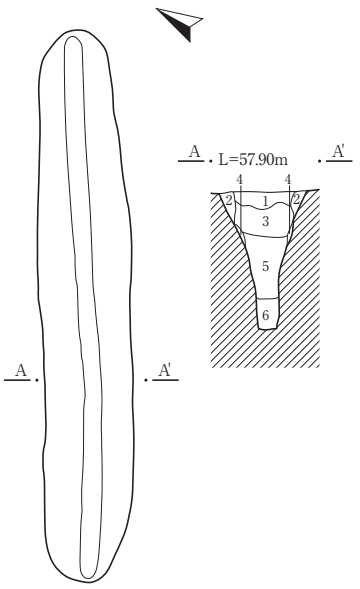
第２図　周辺地形図・グリッド設定図・基本層序

（1）サンニヤ遺跡



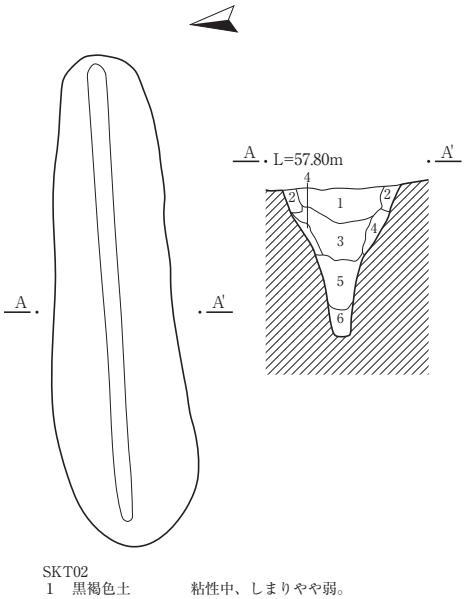
第３図　遺構配置図

SKT01



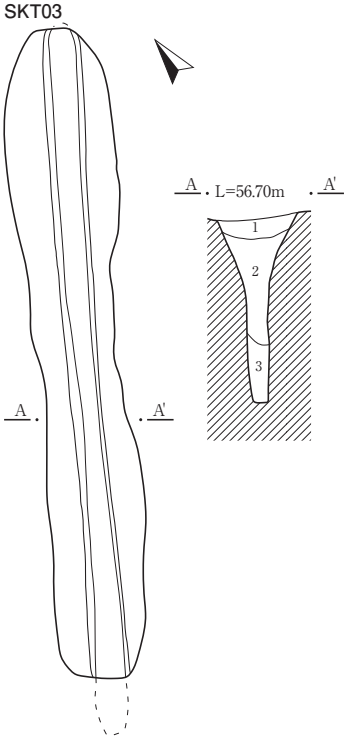
SKT01
1　黒褐色土　(10YR2/2)　粘性中、しまりやや弱。
2　にぶい黄褐色土　(10YR5/4)　粘性やや弱、しまりやや強。壁崩落土。
3　暗褐色土　(10YR3/3)　粘性中、しまりやや弱。地山ブロック微量。
4　明黄褐色土　(10YR6/6)　粘性中、しまりやや強。壁崩落土。
5　暗褐色土　(10YR3/3)　粘性中、しまりやや弱。地山ブロック少量。
6　黒色土　(10YR2/1)　粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。

SKT02



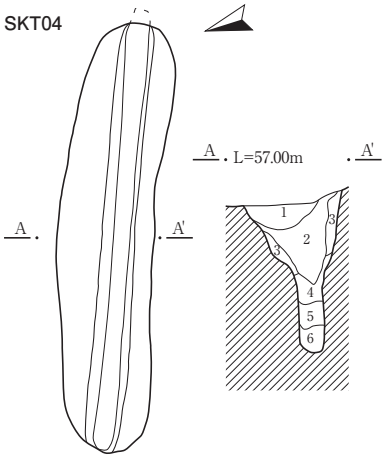
SKT02
1　黒褐色土　(10YR2/2)　粘性中、しまりやや弱。
2　にぶい黄褐色土　(10YR5/4)　粘性やや弱、しまりやや強。壁崩落土。
3　暗褐色土　(10YR3/3)　粘性中、しまりやや弱。地山ブロック微量。
4　明黄褐色土　(10YR6/6)　粘性中、しまりやや強。壁崩落土。
5　暗褐色土　(10YR3/3)　粘性中、しまりやや弱。地山ブロック多量。
6　黒色土　(10YR2/1)　粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。

SKT03



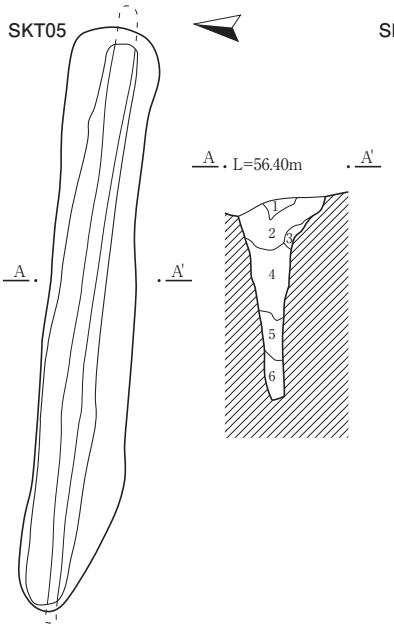
SKT03
1　暗褐色土　(10YR3/3)　粘性中、しまりやや弱。地山ブロック微量。
2　暗褐色土　(10YR3/3)　粘性中、しまりやや弱。地山ブロック少量。
3　黒色土　(10YR2/1)　粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。

SKT04



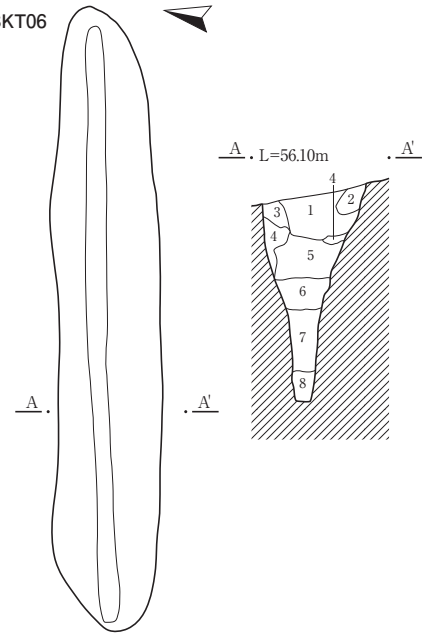
SKT04
1　暗褐色土　(10YR3/3)　粘性中、しまりやや弱。地山ブロック微量。
2　黒褐色土　(10YR2/2)　粘性やや弱、しまり中。1層を混入。地山ブロック微量。
3　明黄褐色土　(10YR6/6)　粘性中、しまりやや強。壁崩落土。
4　暗褐色土　(10YR3/3)　粘性中、しまりやや弱。地山ブロック少量。
5　黒色土　(10YR2/1)　粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。
6　にぶい黄褐色土　(10YR5/3)　粘性やや強、しまり中。壁崩落土。

SKT05



SKT05
1　明黄褐色土　(10YR6/6)　粘性やや強、しまりやや強。ロームブロック。
2　黒褐色～暗褐色土　(10YR3/2～3/3)　粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
3　明黄褐色土　(10YR6/6)　粘性中、しまりやや強。壁崩落土。
4　暗褐色土　(10YR3/3)　粘性中、しまりやや弱。地山ブロック少量。
5　にぶい黄褐色土　(10YR5/4)　粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
6　黒色土　(10YR2/1)　粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。

SKT06

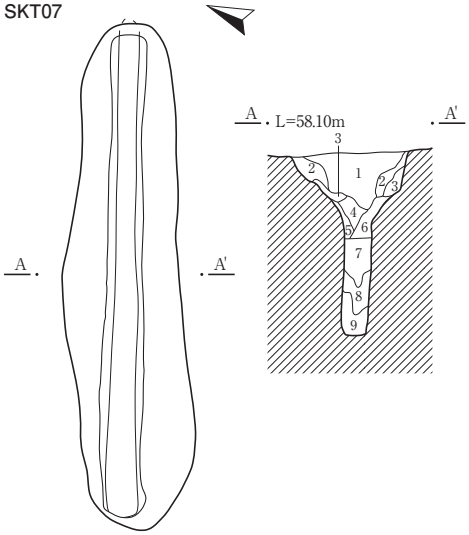


SKT06
1　木根によるカクラン。
2　にぶい黄褐色土　(10YR5/4)　粘性やや弱、しまり中。地山ブロック少量。
3　黒褐色土　(10YR3/1)　粘性やや弱、しまり中。地山ブロック微量。
4　にぶい黄褐色土　(10YR5/4)　粘性やや弱、しまりやや強。壁崩落土。
5　にぶい黄褐色土　(10YR5/3)　粘性中、しまりやや弱。
6　にぶい黄褐色土　(10YR5/3)　粘性やや強、しまりやや強。壁崩落土。
7　明黄褐色土　(10YR6/6)　粘性無し、しまり弱。壁崩落土。
8　黒色土　(10YR2/1)　粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。

0　1：50　1m

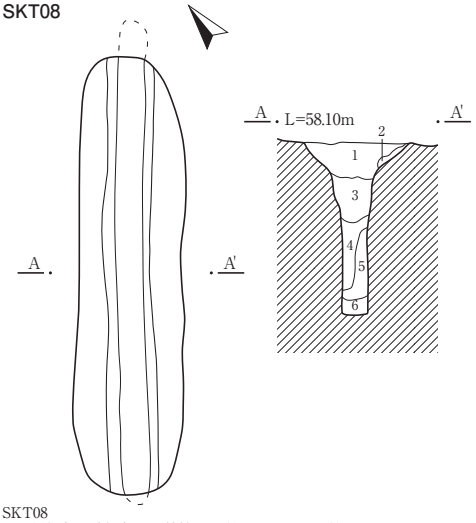
第４図　SKT01～06

SKT07



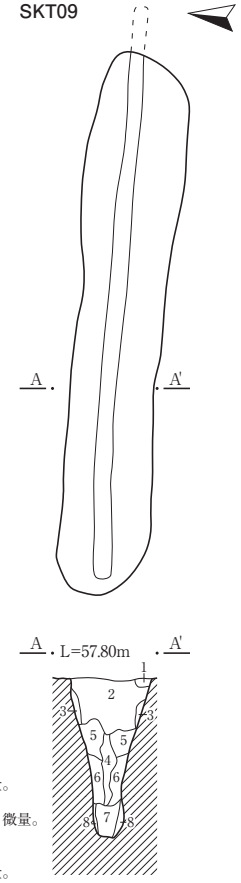
SKT07
1 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
2 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
3 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性やや弱、しまりやや強。壁崩落土。
4 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性中、しまりやや弱。地山ブロック少量。
5 黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3) 粘性中、しまりやや弱。地山ブロック微量。
6 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性中、しまりやや弱。地山ブロック微量。
7 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性中、しまりやや弱。地山ブロック微量。
8 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 粘性やや強、しまり中。地山ブロック多量。壁崩落土。
9 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。

SKT08



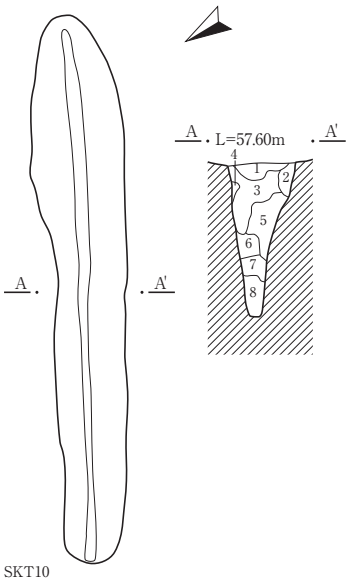
SKT08
1 黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3) 粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性やや弱、しまりやや強。壁崩落土。
3 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性中、しまりやや弱。地山ブロック少量。
4 黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3) 粘性中、しまりやや弱。地山ブロック少量。
5 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強、しまりやや弱。地山ブロック微量。
6 にぶい黄橙色土 (10YR6/4) 粘性強、しまりやや弱。粘質土。

SKT09



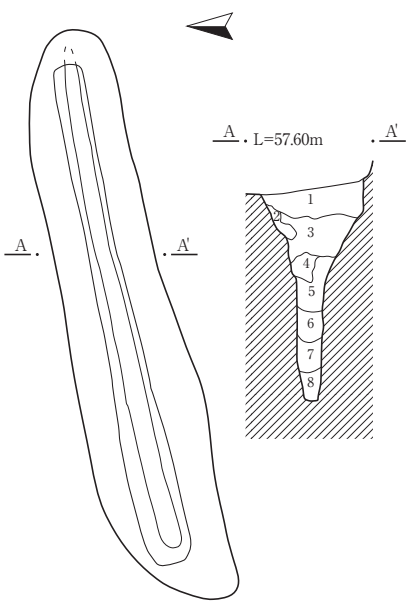
SKT09
1 にぶい黄褐色土（10YR5/4） 粘性やや弱、しまりやや強。壁崩落土。
2 暗褐色土（10YR3/3） 粘性中、しまりやや弱。地山ブロック少量。
3 明褐色土（10YR6/6） 粘性中、しまりやや強。壁崩落土。
4 灰黄褐色土（10YR4/2） 粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
5 にぶい黄褐色土（10YR5/4） 粘性やや弱、しまりやや強。壁崩落土。
6 明黄褐色土（10YR6/6） 粘性弱、しまりやや強。壁崩落土。
7 黒色土（10YR2/1） 粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。
8 にぶい黄橙色（10YR6/4） 粘性強、しまり弱。粘質土。

SKT10



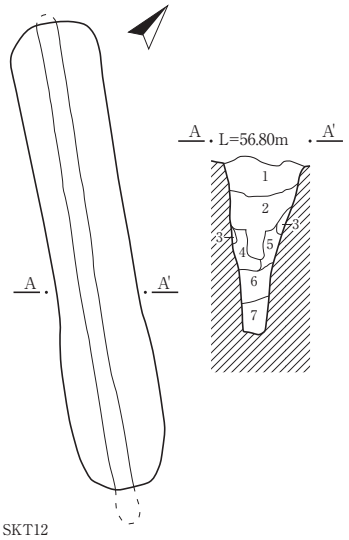
SKT10
1 黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3) 粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性やや弱、しまりやや強。壁崩落土。
3 黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ブロック微量。
4 明褐色土 (10YR6/6) 粘性弱、しまりやや強。壁崩落土。
5 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ブロック微量。
6 明褐色土 (10YR6/6) 粘性強、しまりやや弱。壁崩落土。
7 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性中、しまりやや弱。
8 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。

SKT11



SKT11
1 カクラン
2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性やや弱、しまりやや強。壁崩落土。
3 黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3) 粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
4 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロックやや多量。
5 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
6 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性無し、しまり弱。壁崩落土。
7 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。
8 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘性強、しまり弱。粘質土。

SKT12

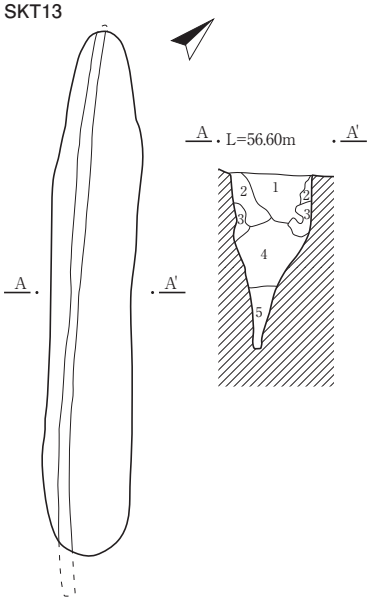


SKT12
1 カクラン
2 黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3) 粘性やや弱、しまり中。地山ブロック微量。
3 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや弱、しまり中。地山ブロック少量。
4 明黄褐色 (10YR6/6) 粘性弱、しまりやや強。壁崩落土。
5 黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3) 粘性やや弱、しまり中。地山ブロック少量。
6 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
7 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまりやや弱。地山ブロック少量。
8 黒色土 (10YR2/1) 粘性中、しまりやや弱。地山ブロックやや多量。

0 1：50 1m

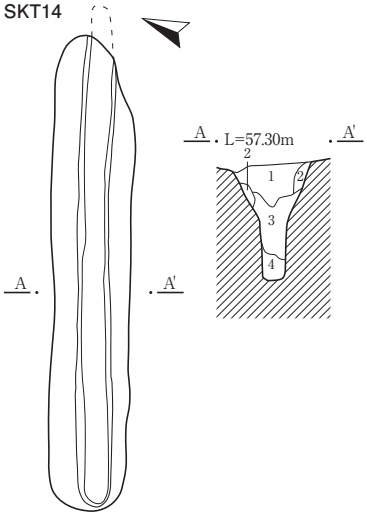
第5図　SKT07～12

SKT13



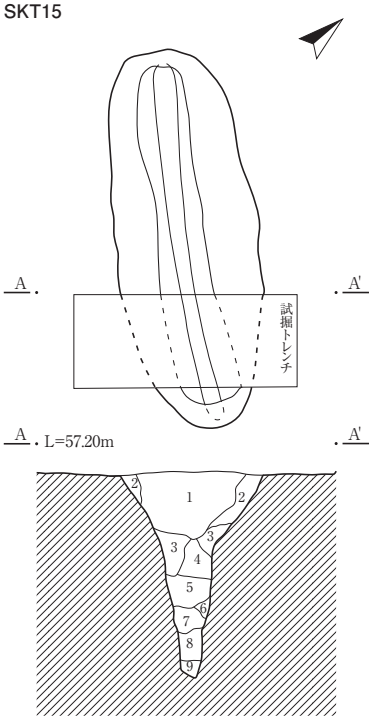
SKT13
1　黒褐色土（10YR3/2）　粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
2　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　粘性やや弱、しまり中。壁崩落土。
3　明黄褐色土（10YR6/6）　粘性弱、しまり中。壁崩落土。
4　黒褐色～暗褐色土（10YR3/2～3/3）　粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック少量。
5　黒色土（10YR2/1）　粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。

SKT14



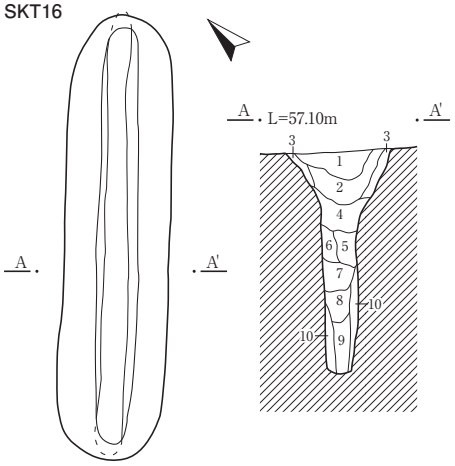
SKT14
1　黒褐色土（10YR3/2）　粘性やや弱、しまりやや強。地山ブロック微量。
2　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　粘性やや弱、しまりやや強。壁崩落土。
3　暗褐色土（10YR3/3）　粘性やや弱、しまりやや強。地山ブロック微量。
4　黒色土（10YR2/1）　粘性中、しまり中。地山ブロック微量。

SKT15



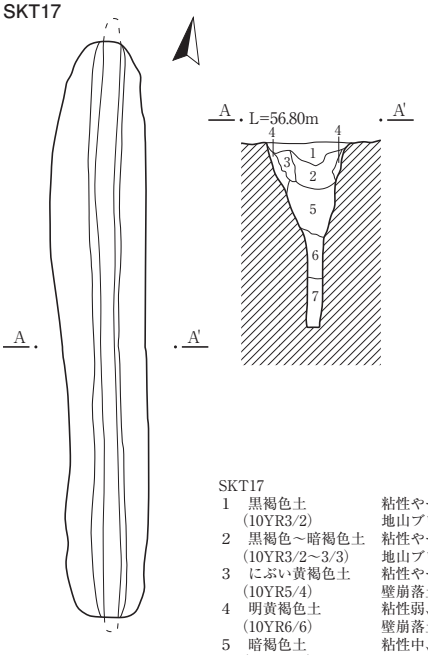
SKT15
1　黒褐色土（10YR3/2）　粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
2　黒褐色～暗褐色土（10YR3/2～3/3）　粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック少量。
3　暗褐色土（10YR3/3）　粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック少量。
4　黒褐色～暗褐色土（10YR3/2～3/3）　粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
5　暗褐色土（10YR3/3）　粘性中、しまり中。地山ブロック少量。
6　明黄褐色土（10YR6/6）　粘性強、しまりやや強。粘質土。壁崩落土。
7　黒褐色土（10YR2/2）　粘性中、しまりやや強。地山ブロックやや多量。
8　にぶい黄橙色土（10YR6/4）　粘性やや弱、しまり中。壁崩落土。
9　黒色土（10YR2/1）　粘性強、しまりやや強。粘質土。

SKT16



SKT16
1　黒褐色～暗褐色土（10YR3/2～3/3）　粘性やや弱、しまりやや弱。
2　黒褐色～暗褐色土（10YR3/2～3/3）　粘性やや弱、しまり中。地山ブロック微量。
3　暗褐色土（10YR3/3）　粘性弱、しまりやや弱。地山ブロック少量。
4　暗褐色土（10YR3/3）　粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック少量。
5　黒褐色土（10YR2/2）　粘性やや弱、しまり中。地山ブロック少量。
6　暗褐色土（10YR3/3）　粘性やや弱、しまり中。地山ブロックやや多量。
7　灰黄褐色土（10YR4/2）　粘性やや弱、しまりやや弱。壁崩落土。
8　黒褐色土（10YR2/2）　粘性中、しまり中。地山ブロック少量。
9　黒色土（10YR2/1）　粘性やや強、しまりやや強。地山ブロック微量。
10　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　粘性やや強、しまりやや強。壁崩落土。

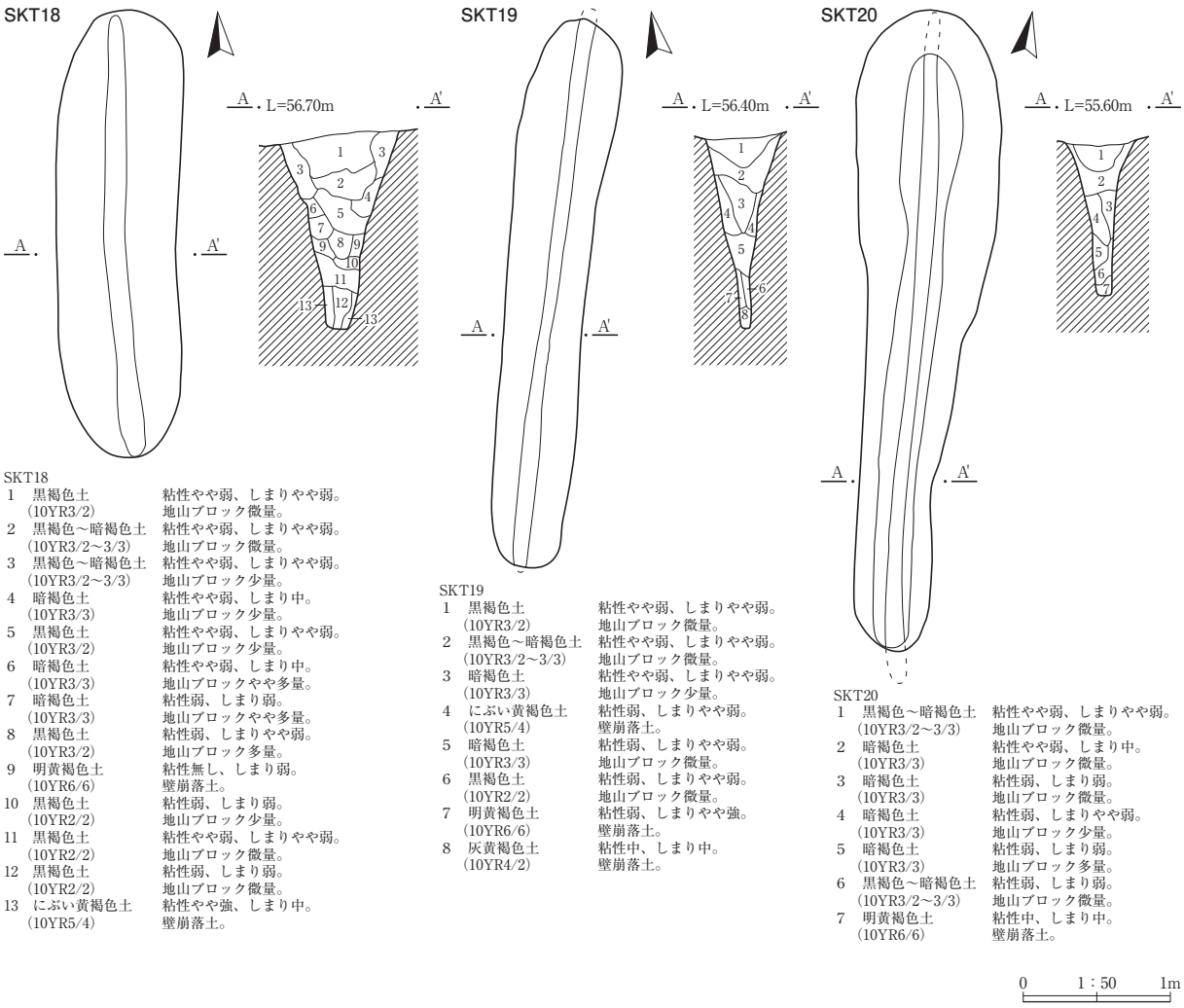
SKT17



SKT17
1　黒褐色土（10YR3/2）　粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
2　黒褐色～暗褐色土（10YR3/2～3/3）　粘性やや弱、しまり中。地山ブロック少量。
3　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　粘性やや弱、しまりやや弱。壁崩落土。
4　明黄褐色土（10YR6/6）　粘性弱、しまり中。壁崩落土。
5　暗褐色土（10YR3/3）　粘性中、しまり中。地山ブロック少量。
6　黒褐色土（10YR2/2）　粘性やや強、しまり中。
7　黒色土（10YR2/1）　粘性やや強、しまり弱。地山ブロック少量。

0　1：50　1m

第6図　SKT13～17



SKT18

1	黒褐色土 (10YR3/2)	粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
2	黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3)	粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
3	黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3)	粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック少量。
4	暗褐色土 (10YR3/3)	粘性やや弱、しまり中。地山ブロック少量。
5	黒褐色土 (10YR3/2)	粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック少量。
6	暗褐色土 (10YR3/3)	粘性やや弱、しまり中。地山ブロックやや多量。
7	暗褐色土 (10YR3/3)	粘性弱、しまり弱。地山ブロックやや多量。
8	黒褐色土 (10YR3/2)	粘性弱、しまりやや弱。地山ブロック多量。
9	明黄褐色土 (10YR6/6)	粘性無し、しまり弱。壁崩落土。
10	黒褐色土 (10YR2/2)	粘性弱、しまり弱。地山ブロック少量。
11	黒褐色土 (10YR2/2)	粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
12	黒褐色土 (10YR2/2)	粘性弱、しまり弱。地山ブロック微量。
13	にぶい黄褐色土 (10YR5/4)	粘性やや強、しまり中。壁崩落土。

SKT19

1	黒褐色土 (10YR3/2)	粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
2	黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3)	粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
3	暗褐色土 (10YR3/3)	粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック少量。
4	にぶい黄褐色土 (10YR5/4)	粘性弱、しまりやや弱。壁崩落土。
5	暗褐色土 (10YR3/3)	粘性弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
6	黒褐色土 (10YR2/2)	粘性弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
7	明黄褐色土 (10YR6/6)	粘性弱、しまりやや強。壁崩落土。
8	灰黄褐色土 (10YR4/2)	粘性中、しまり中。壁崩落土。

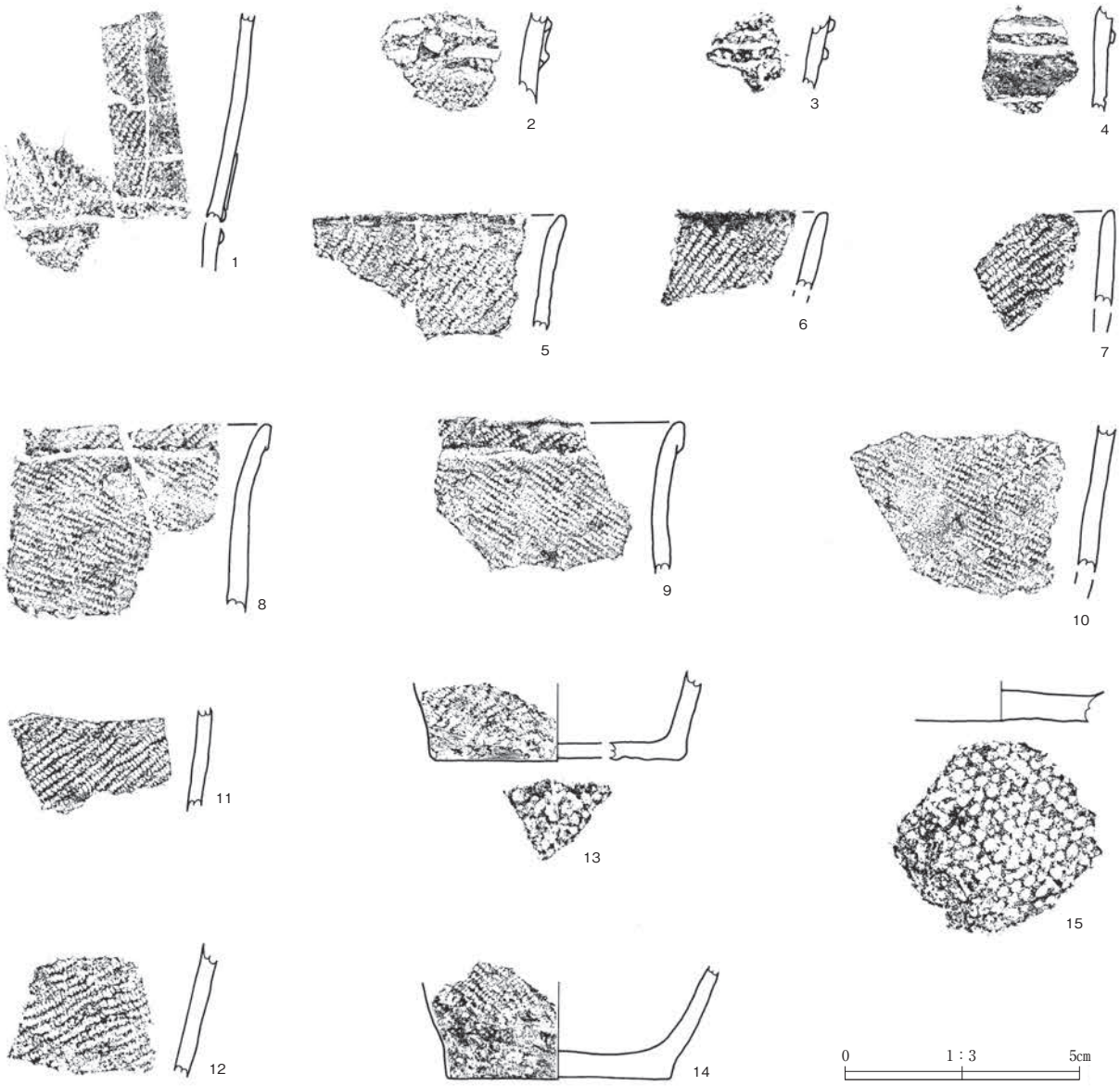
SKT20

1	黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3)	粘性やや弱、しまりやや弱。地山ブロック微量。
2	暗褐色土 (10YR3/3)	粘性やや弱、しまり中。地山ブロック微量。
3	暗褐色土 (10YR3/3)	粘性弱、しまり弱。地山ブロック微量。
4	暗褐色土 (10YR3/3)	粘性弱、しまりやや弱。地山ブロック少量。
5	暗褐色土 (10YR3/3)	粘性弱、しまり弱。地山ブロック多量。
6	黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2～3/3)	粘性弱、しまり弱。地山ブロック微量。
7	明黄褐色土 (10YR6/6)	粘性中、しまり中。壁崩落土。

第７図　SKT18～20

第１表　陥し穴状遺構一覧

番号	検出面	位置	標高(m)	規模		深さ(m)	断面形状	長軸方向
				開口部(m)	底部(m)			
1	Ⅳ層	ⅢＢ２・６・７	57.7	3.66×0.61	3.59×0.11	0.91	V	N-64°-E
2	Ⅳ層	ⅢＢ１	57.6	3.25×0.89	3.03×0.12	0.97	V	N-89°-W
3	Ⅳ層	ⅡＡ20・ＩＡ16	56.6	4.31×0.72	4.72×0.15	1.21	Y	N-33°-E
4	Ⅳ層	ⅡＡ19・20・25	56.7	2.85×0.64	2.82×0,12	1.02	Y	N-68°-W
5	Ⅳ層	ⅡＡ19・20	56.2	3.85×0.61	4.11×0.13	1.32	Y	N-84°-W
6	Ⅳ層	ⅡＡ13	55.9	4.13×0.72	3.94×0.14	1.36	V	N-78°-E
7	Ⅳ層	ⅡＢ24・25	57.9	3.34×0.77	3.28×0.18	1.2	Y	N-68°-E
8	Ⅳ層	ⅡＢ20・24	58.0	2.89×0.7	3.19×0.17	1.13	Y	N-45°-E
9	Ⅳ層	ⅡＢ19・20	57.7	3.59×0.67	3.79×0.11	1.04	V	N-89°-E
10	Ⅳ層	ⅡＢ13・15	57.5	3.62×0.62	3.52×0.08	1.02	V	N-69°-W
11	Ⅳ層	ⅡＢ３	57.3	3.88×0.82	3.89×0.13	1.41	Y	N-88°-E
12	Ⅳ層	ⅡＡ18・23	56.7	3,12×0.61	3.42×0.12	1.14	V	N-49°-W
13	Ⅳ層	ⅡＡ17	56.4	3.46×0.58	3.78×0.08	1.16	V	N-45°-W
14	Ⅳ層	ⅡＢ７・12	57.2	3.13×0.55	3.28×0.14	0.76	Y	N-72°-E
15	Ⅳ層	ⅡＢ６	57.1	2.51×0.96	2.49×0.14	1.36	Y	N-55°-W
16	Ⅳ層	ⅡＢ１・６	56.9	2.94×0.69	2.93×0.16	1.46	Y	N-50°-E
17	Ⅳ層	ⅡＡ21・ＩＢ１	56.7	3.81×0.63	4.06×0.12	1.23	Y	N-８°-W
18	Ⅳ層	ＩＢ20・25	56.5	3.03×0.83	2.99×0.14	1.33	V	N-２°-E
19	Ⅳ層	ＩＡ24・ＩＢ４	56.2	3.73×0.62	3.97×0.1	1.29	V	N-７°-E
20	Ⅳ層	ＩＡ２・７	55.4	4.36×0.97	4.56×0.12	1.02	Y	N-３°-W



第８図　出土遺物

第２表　遺物観察表

掲載番号	器種	部位	出土地点	層位	口径	器高	底径	文様・調整	焼成	写図	図版	備考
1	深鉢	体部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<11.0>	－	外面：隆帯(ボタン状貼付の剥離あり)、細い沈線→縄文LR(縦回転)→磨消　ミガキ 内面：ナデ(斜)	やや不良			
2	深鉢	体部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<3.9>	－	外面:ボタン状貼付を伴う隆帯、縄文LR(縦回転) 内面：ナデ	やや不良			１と同一個体か
3	深鉢	体部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<3.3>	－	外面：隆帯、縄文(磨滅)　内面：ナデ	やや不良			
4	深鉢	体部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<4.6>	－	外面：沈線→縄文LR(縦回転)？→磨消 ミガキ　内面：ナデ	やや良好			１と同一個体か
5	深鉢	口縁部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<5.0>	－	外面：縄文LR(縦回転)　内面：ナデ(横)	良好			
6	深鉢	口縁部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<3.9>	－	外面：縄文LR(縦回転)　内面：ナデ(横)	やや良好			５と同一個体か
7	深鉢	口縁部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<5.3>	－	外面：縄文LR(縦回転)　内面：ナデ(横)	やや良好			５と同一個体か
8	深鉢	口縁部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<8.1>	－	外面：縄文LR(縦回転) 口縁部付近のみ横回転　内面：ナデ(横)	やや不良			折り返し口縁
9	深鉢	口縁部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<6.6>	－	外面：縄文LR(縦回転)　口縁部付近のみ横回転 内面：ナデ(横)	やや不良			外面にスス付着、折り返し口縁、８と同一個体か
10	深鉢	体部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<7.4>	－	外面：縄文LR(縦回転)　内面：ナデ(横)	やや不良			
11	深鉢	体部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<4.5>	－	外面：縄文LR(縦回転)　内面：ナデ	やや良好			
12	深鉢	体部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<5.7>	－	外面：縄文LR(縦回転)　内面：ナデ(斜)	やや良好			内面にコゲ付着
13	深鉢	底部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<3.3>	<10.6>	外面：縄文LR(横回転)　内面：ナデ 底面：網代痕	不良			内面にコゲ付着
14	深鉢	底部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<4.9>	9.6	外面：縄文LR(縦回転)　内面：ナデ 底面：ナデ	やや不良			
15	深鉢	底部	ⅢＢ７	カクラン(Ⅱａ層)	－	<1.3>	<7.4>	内面：ナデ　底面：網代痕	やや不良			

遺跡全景

調査区全景

写真図版1　航空写真

SKT01完掘

SKT02完掘

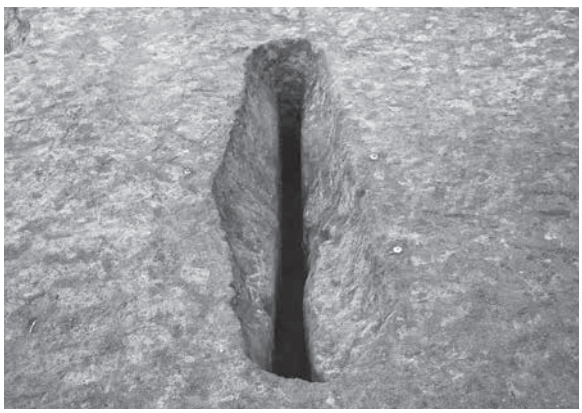
SKT03完掘

SKT04完掘

SKT05完掘

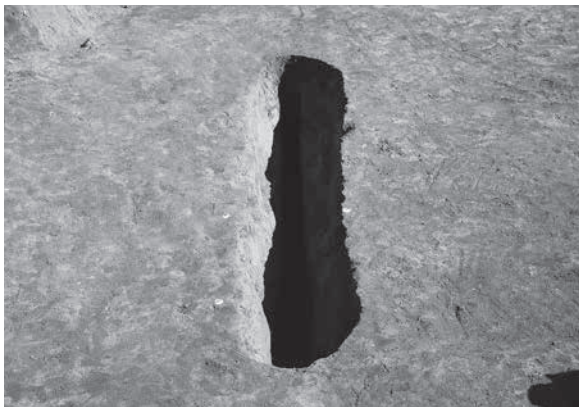
SKT06完掘

SKT07完掘

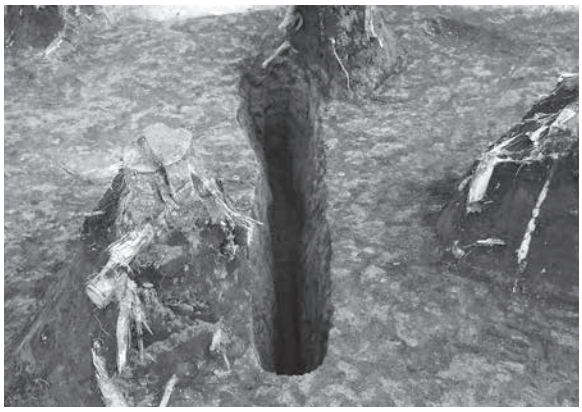


SKT08完掘

写真図版２　検出遺構（１）



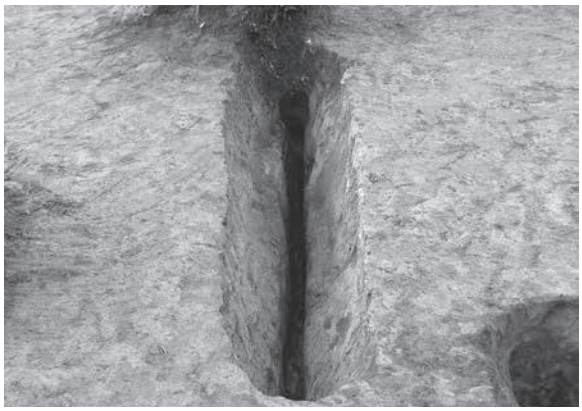
SKT09完掘



SKT10完掘

SKT11完掘

SKT12完掘



SKT13完掘

SKT14完掘

SKT15完掘

SKT16完掘

写真図版３　検出遺構（２）

SKT17完掘

SKT18完掘

SKT19完掘

SKT20完掘

基本層序

作業前風景

作業風景

作業風景

写真図版４　検出遺構（３）・基本層序・作業前風景・作業風景

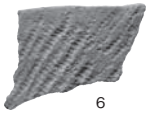
1

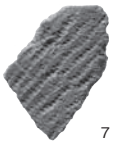
2

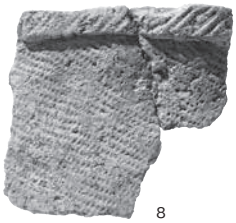
3

4

5


6


7

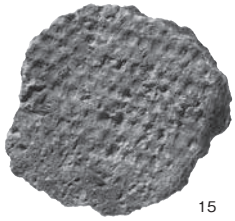

8

9

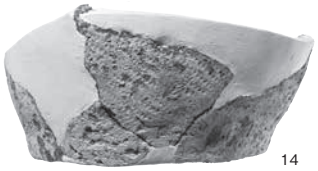
10

11

13


15

12


14

写真図版５　遺物写真

（２）房の沢Ⅳ遺跡

所　在　地	下閉伊郡山田町山田第14地割ほか	**遺跡コード・略号**	LG94-0050・BSⅣ-15
委　託　者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	**調査対象面積**	2,370㎡
事　業　名	三陸沿岸道路	**調査終了面積**	2,370㎡
発掘調査期間	平成27年７月21日～10月９日	**調 査 担 当 者**	阿部勝則・光井文行・中村隼人・高橋静歩

１　調査に至る経緯

房の沢Ⅳ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（山田～宮古）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359㎞の自動車道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成14年に供用した山田道路を建設するに先立って三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、昭和62年度より試掘調査を行い、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、平成８年４月13日～６月14日にわたり本発掘調査を行い、山田道路の事業用地については調査済となっている。この度の山田宮古道路を建設するにあたり、房の沢Ⅳ遺跡の未調査部分が事業用地となったため岩手県教育委員会と協議を行い、平成27年度４月10日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

２　遺跡の位置と立地

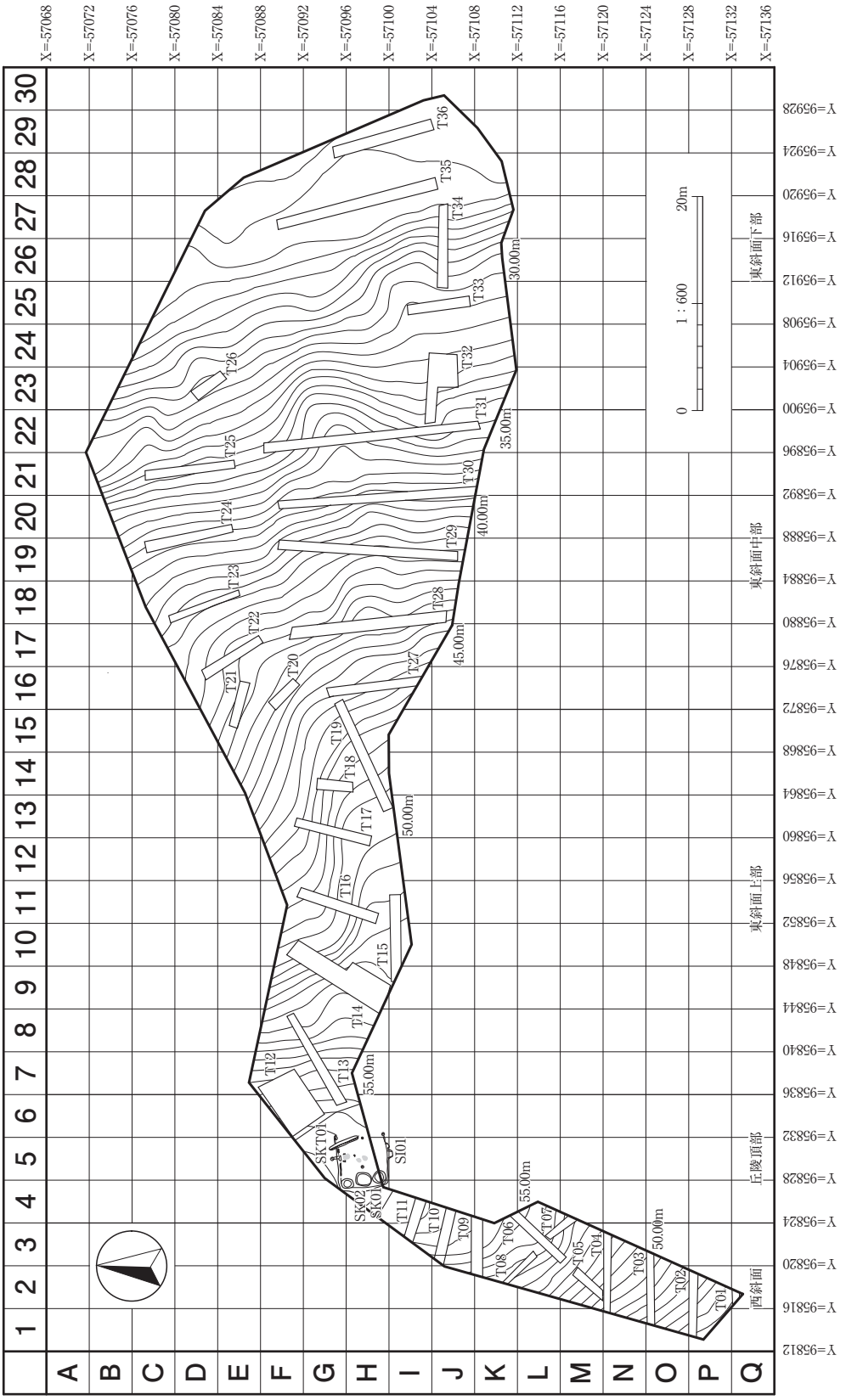
遺跡は岩手県下閉伊郡山田町山田14地割内に所在する。山田町立山田北小学校の北西200ｍに位置し、南に関口川を望む低位丘陵上に位置する。遺跡範囲はおよそ南北200m、東西100mの範囲で、標高は海抜26～58ｍである。遺跡範囲は前述の丘陵範囲とほぼ重複するが、山田湾を望む遺跡中央部から南端部の範囲は、当事業団によって平成８年から二箇年の調査が行われており、縄文時代の集落跡と古墳時代から平安時代の古墳群が検出されている（岩埋文1998）。今年度調査区は遺跡範囲の北端部に位置し、中央を尾根頂部とし、その東西を北向きの急斜面とする地形であった。山陰に相当する北側の急斜面側からは、山田湾を眺望することができない。周辺遺跡としては東接する縄文時代から平安時代の集落遺跡である沢田Ⅰ遺跡を挙げることができる。

1：50,000　大槌

第１図　遺跡位置図

３　基本層序

基本的には前回調査時の基本層序と同様である。今回検出された遺構群は全てⅣ層上面で検出している。調査区東斜面下部は近接する三陸沿岸道路造成に伴う削平を受けており、包含層を検出することはできなかった。


X=57068
X=57072
X=57076
X=57080
X=57084
X=57088
X=57092
X=57096
X=57100
X=57104
X=57108
X=57112
X=57116
X=57120
X=57124
X=57128
X=57132
X=57136
Y=95812
Y=95816
Y=95820
Y=95824
Y=95828
Y=95832
Y=95836
Y=95840
Y=95844
Y=95848
Y=95852
Y=95856
Y=95860
Y=95864
Y=95868
Y=95872
Y=95876
Y=95880
Y=95884
Y=95888
Y=95892
Y=95896
Y=95900
Y=95904
Y=95908
Y=95912
Y=95916
Y=95920
Y=95924
Y=95928
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
T01
T02
T03
T04
T05
T06
T07
T08
T09
T10
T11
T12
T13
T14
T15
T16
T17
T18
T19
T20
T21
T22
T23
T24
T25
T26
T27
T28
T29
T30
T31
T32
T33
T34
T35
T36
SI01
SK01
SK02
SKT01
50.00m
55.00m
55.00m
45.00m
40.00m
35.00m
30.00m
0
1：600
20m
西斜面
丘陵頂部
東斜面上部
東斜面中部
東斜面下部

第２図　遺構配置図

Ⅰ層　10YR2/2黒褐色土　　表土。層厚５～160㎝。
Ⅱ層　10YR2/2黒褐色土　　縄文～古代遺物微量包含。層厚０～15㎝。
Ⅲ層　10YR2/1黒色土　　縄文～古代遺物微量包含。層厚０～20㎝。
Ⅳ層　10YR3/3暗褐色土　　縄文遺物微量包含。層厚０～30㎝。
Ⅴ層　10YR4/4褐色土　　上位にTo-Cu包含。無遺物層。層厚０～40㎝。
Ⅵ層　10YR7/8黄橙色土　　地山層。花崗岩風化礫起源。東斜面中部以下複数箇所で湧水。

４　調査の概要

調査区全体に適宜トレンチを設定し試掘調査を行ったが、丘陵北東斜面及び同北西斜面で遺構を検出することはできなかった（Ｔ01～Ｔ36）。丘陵頂部の平坦面には前回調査で検出された時期不明の竪穴住居跡１棟（ＲＡ02）と土坑１基（ＲＤ19）が存在することが明らかであったことから、この周辺45㎡は全面表土除去し、本調査を行った。

（１）遺構

今回調査で検出された遺構は縄文時代の陥し穴状遺構１基（ＳＫＴ01）と、奈良時代末から平安時代の竪穴住居跡１棟（ＳＩ01）、奈良時代以降の土坑２基（ＳＫ01・ＳＫ02）だが、そのいずれもが丘陵頂部の平坦面で検出された。なお、各遺構の説明は略号（ＳＩ・ＳＫ等）で記載する。

第１号竪穴住居跡　（ＳＩ01、第３・４図、写真図版２・３）

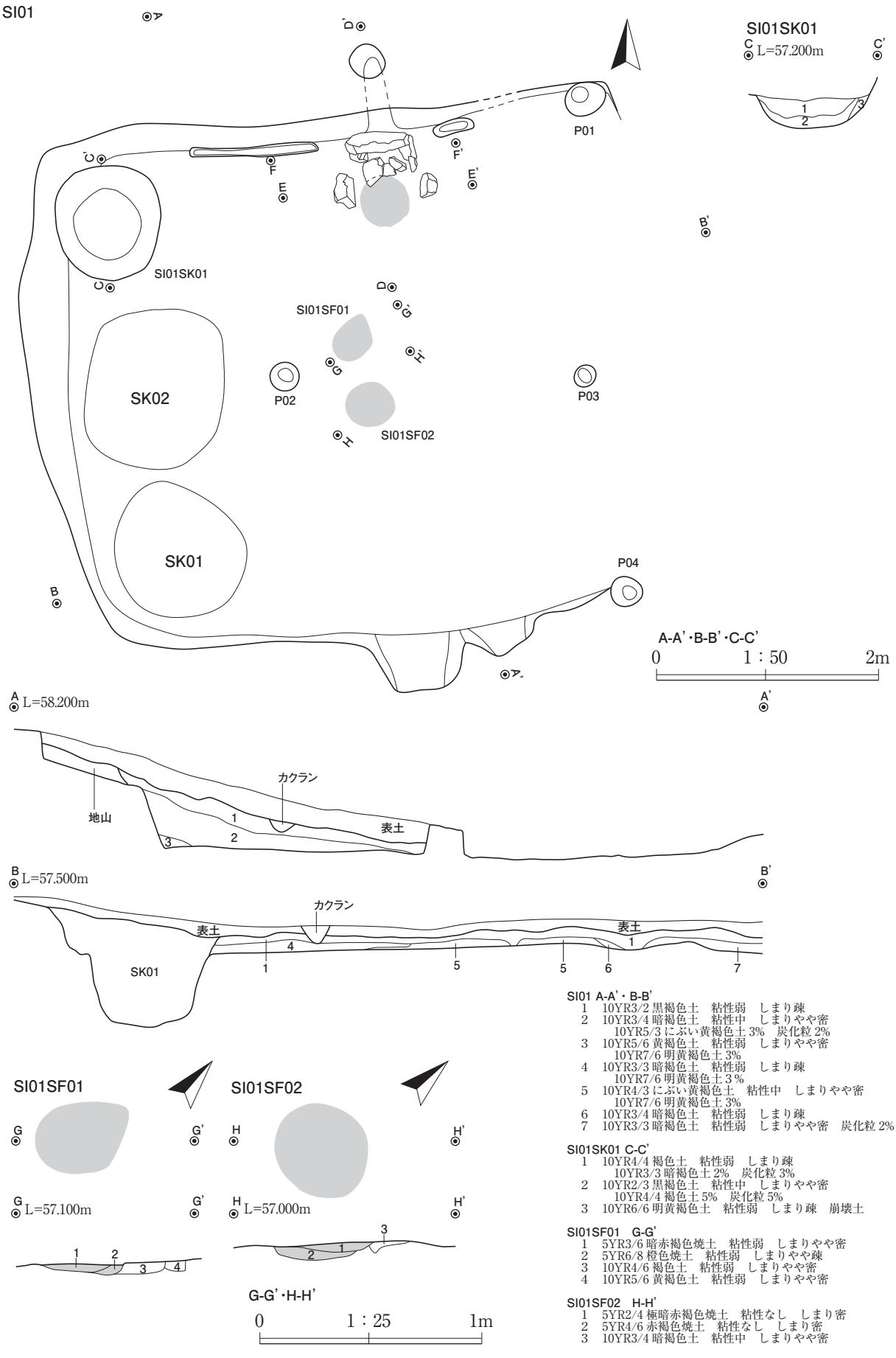
＜位置・検出状況＞丘陵尾根頂部Ｈ５グリッドに位置する。前回の調査（平成９年度）で一部精査されていた竪穴住居跡（ＲＡ02）の北側部分を検出し精査した。遺構が埋まり切らず中央が浅く窪んでいる状態を視認できたため、遺構プランに合わせベルトを設定し堆積土を掘り下げた。検出面はⅣ層上面である。ＳＫ01・ＳＫ02・ＳＫＴ01と重複するが、ＳＫ01・ＳＫ02より古く、ＳＫＴ01より新しい。

＜形状・堆積土＞東壁が削平された可能性があるが、残存する壁や床面の範囲から平面形は東西が幾分長い長方形を呈したと推定される。平面規模は東西5.7ｍ（推定）、南北4.8ｍである。カマド煙道方向を基準とした主軸方向はＮ－8.5°－Ｗである。堆積土は主に上半が暗褐色土塊を含む黒褐色土、下半がにぶい黄褐色土塊と炭化物粒を含む暗褐色土を主体とする。堆積の様相は自然堆積である。

＜カマド＞カマドは北壁中央部東寄りで１基検出された。燃焼部焼土、煙道、カマド両袖の芯材と天井を構成する礫、袖構築土の一部が残存していた。燃焼部焼土径は48×42㎝、被熱深度は８㎝である。煙道は北壁際から長さ45㎝で、幅は20㎝である。煙道底面は燃焼部焼土面から緩やかに立ち上がる形状で、構築方法は刳り貫き式である。袖芯材である礫は、これを接する部分のみを掘り窪め設置されていた。北壁付近と袖芯材及び天井石と考えられる礫周辺では袖構築土と推定される黄褐色土が検出された。

＜床面・壁＞床面は堅くしまりほぼ平坦である。床面はカマド周辺を中心に中央部が、暗褐色土塊を含む黄褐色土の貼床が施されおり、厚さは２～３㎝である。壁は床面から幾分外傾しながら立ち上がっている。壁高は北壁が62㎝、西壁が55㎝、南壁が23㎝である。カマドが設置されている北壁の反対側にあたる南壁中央部に入口施設と考えられるスロープ状の掘り込みが二か所検出された。

＜附属施設＞土坑１基（ＳＩ01ＳＫ01）、柱穴４個（ＳＩ01Ｐ01～Ｐ04）、壁溝１本が検出された。床面北西隅で検出された土坑ＳＩ01ＳＫ01の断面形は逆台形型である。開口部径は98×92㎝、底部径64×60㎝で、深さは29㎝である。堆積土は上半が暗褐色土塊と炭化物粒を多く含む褐色土、下半が褐色土塊と炭化物粒を含む黒褐色土である。柱穴はそれぞれ床面北東隅（Ｐ01）、中央西寄り（Ｐ02）、中



SI01 A-A'・B-B'
1　10YR3/2 黒褐色土　粘性弱　しまり疎
2　10YR3/4 暗褐色土　粘性中　しまりやや密
　10YR5/3 にぶい黄褐色土 3%　炭化粒 2%
3　10YR5/6 黄褐色土　粘性弱　しまりやや密
　10YR7/6 明黄褐色土 3%
4　10YR3/3 暗褐色土　粘性弱　しまり疎
　10YR7/6 明黄褐色土 3%
5　10YR4/3 にぶい黄褐色土　粘性中　しまりやや密
　10YR7/6 明黄褐色土 3%
6　10YR3/4 暗褐色土　粘性弱　しまり疎
7　10YR3/3 暗褐色土　粘性弱　しまりやや密　炭化粒 2%

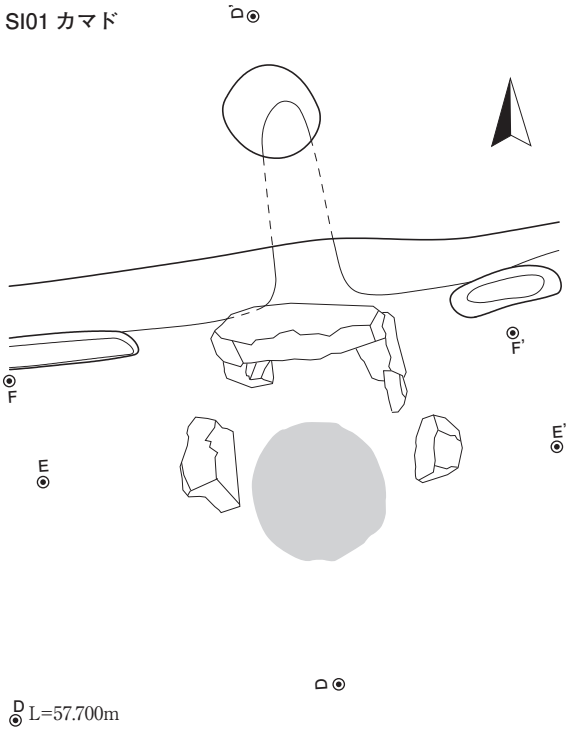
SI01SK01 C-C'
1　10YR4/4 褐色土　粘性弱　しまり疎
　10YR3/3 暗褐色土 2%　炭化粒 3%
2　10YR2/3 黒褐色土　粘性中　しまりやや密
　10YR4/4 褐色土 5%　炭化粒 5%
3　10YR6/6 明黄褐色土　粘性弱　しまり疎　崩壊土

SI01SF01　G-G'
1　5YR3/6 暗赤褐色焼土　粘性弱　しまりやや密
2　5YR6/8 橙色焼土　粘性弱　しまりやや疎
3　10YR4/6 褐色土　粘性弱　しまりやや密
4　10YR5/6 黄褐色土　粘性弱　しまりやや密

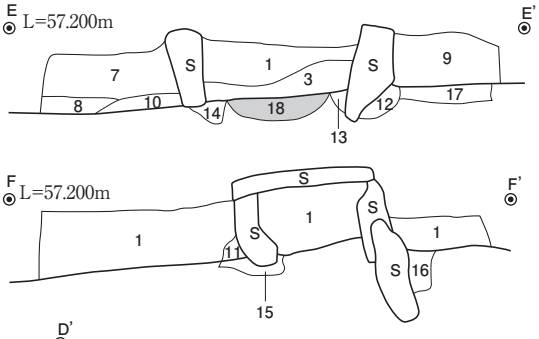
SI01SF02　H-H'
1　5YR2/4 極暗赤褐色焼土　粘性なし　しまり密
2　5YR4/6 赤褐色焼土　粘性なし　しまり密
3　10YR3/4 暗褐色土　粘性中　しまりやや密

第3図　SI01（1）

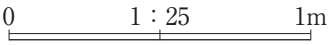
SI01 カマド



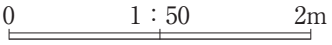
SI01カマド D-D'・E-E'・F-F'
1　10YR3/3暗褐色土　粘性弱　しまりやや密　炭化粒1%
2　10YR5/6黄褐色土　粘性中　しまりやや密
3　10YR4/6褐色土　粘性弱　しまり疎　10YR5/6黄褐色土5%　炭化粒1%
4　10YR4/4褐色土　粘性弱　しまり疎　10YR3/3暗褐色土1%
5　10YR3/4暗褐色土　粘性中　しまり疎　10YR4/4褐色土2%　炭化粒2%
6　5YR2/4極暗赤褐色土　粘性弱　しまり密　焼土粒2%　炭化粒2%
7　10YR3/4暗褐色土　粘性弱　しまり疎　炭化粒1%
8　10YR3/2黒褐色土　粘性弱　しまりやや密　炭化粒1%
9　10YR2/3黒褐色土　粘性弱　しまりやや密　炭化粒2%
10　10YR5/4にぶい黄褐色土　粘性弱　しまりやや密　10YR4/4褐色土1%　炭化粒1%
11　10YR5/6黄褐色土　粘性弱　しまりやや密　10YR7/6明黄褐色土3%
12　10YR4/4褐色土　粘性弱　しまり疎
13　7.5YR4/6褐色土　粘性弱　しまり疎
14　10YR5/6黄褐色土　粘性弱　しまり密
15　10YR6/4にぶい黄橙色土　粘性弱　しまり密
16　10YR7/6明黄褐色土　粘性弱　しまりやや密
17　10YR6/6明黄褐色土　粘性弱　しまり密
18　5YR5/8明赤褐色焼土　粘性なし　しまり密

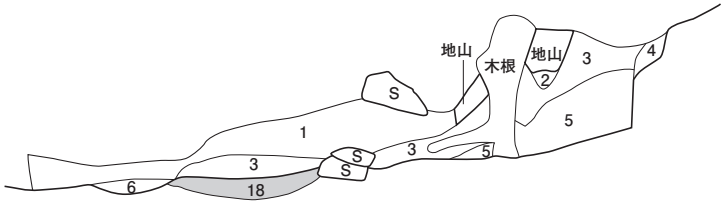


SI01 D-D'・E-E'・F-F'

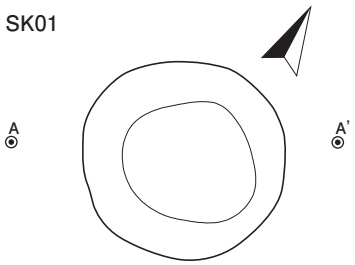


SK01・SK02・SKT01

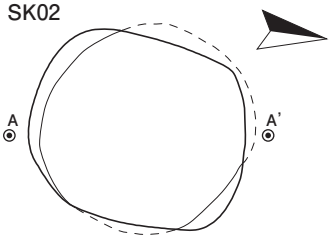




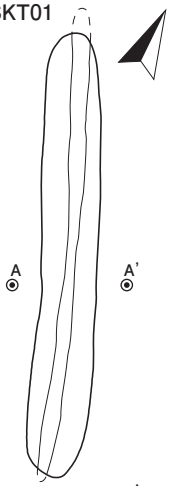
SK01

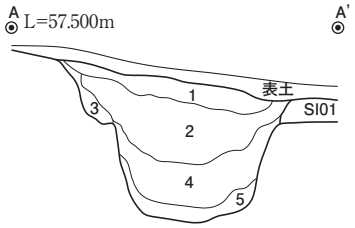


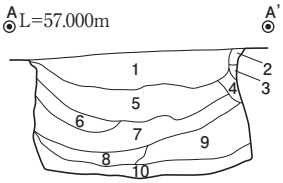
SK02

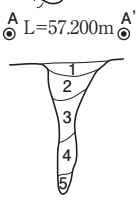


SKT01









SK01 A-A'
1　10YR2/1黒色土　粘性弱　しまり疎　10YR2/3黒褐色土１%　炭化粒３%
2　10YR3/3暗褐色土　粘性中　しまり疎　10YR4/3にぶい黄褐色土２%　10YR2/2黒褐色土１%　炭化粒３%
3　10YR4/4褐色土　粘性弱　しまり疎　10YR7/6明黄褐色土２%
4　10YR6/4にぶい黄橙色土　粘性弱　しまり疎　10YR7/6明黄褐色土３%　炭化物粒２%
　土師器片・鉄製紡錘車が出土
5　10YR5/4にぶい黄褐色土　粘性弱　しまり疎　10YR7/6明黄褐色土３%　炭化物粒２%

SK02 A-A'
1　10YR2/2黒褐色土　粘性弱　しまりやや疎　10YR3/4暗褐色土5%　炭化粒3%　焼土粒1%
2　10YR2/2黒褐色土　10YR3/4暗褐色土5%　炭化粒3%　焼土粒1%
3　10YR6/4にぶい黄橙色土　粘性なし　しまりやや密　崩落地山塊
4　10YR3/3暗褐色土　粘性中　しまりやや疎
5　10YR5/6黄褐色土　粘性弱　しまりやや疎　10YR3/4暗褐色土5%　10YR2/2黒褐色土3%
6　10YR5/6黄褐色土　粘性弱　しまりやや疎　10YR3/4暗褐色土10%　10YR2/2黒褐色土5%
7　10YR5/6黄褐色土　粘性弱　しまりやや疎　10YR3/4暗褐色土10%
8　10YR5/6黄褐色土　粘性中　しまりやや密　10YR4/3にぶい黄褐色土30%
9　10YR4/3にぶい黄褐色土　粘性中　しまりやや密　10YR5/6黄褐色土30%
10　10YR4/3にぶい黄褐色土　粘性中　しまりやや密　10YR5/6黄褐色土10%　10YR2/2黒褐色土30%

SKT01 A-A'
1　10YR3/3暗褐色土　粘性弱　しまりやや密
　10YR4/4褐色土1%　炭化粒1%
2　10YR4/4褐色土　粘性中　しまりやや密　炭化粒2%
3　10YR5/6黄褐色土　粘性中　しまりやや密　炭化粒1%
4　10YR6/6明黄褐色土　粘性中　しまり疎
　10YR4/4褐色土3%　炭化粒2%
5　10YR5/4にぶい黄褐色土　粘性弱　しまり疎
　10YR7/6明黄褐色土3%

第４図　SI01（２）・SK01・SK02・SKT01

央東寄り（Ｐ03）、南東隅（Ｐ04）で検出された。それぞれの規模は、Ｐ01が径38×30㎝で深さ48㎝、Ｐ02が径28×28㎝で深さ26㎝、Ｐ03が径18×20㎝で深さ39㎝、Ｐ04が径30×30㎝で深さ60㎝である。堆積土はＰ01が暗褐色土、Ｐ02～Ｐ04が褐色土の単層である。軸組及び小屋組の具体は未詳だが、柱穴位置から考えるとＰ02・Ｐ03は棟持柱としての機能が考えられる。壁溝は北壁中央でカマドを挟み検出されている。幅10～15㎝程度で深さは５㎝程度である。壁溝底面の形状はＵ字形である。
＜地床炉＞遺構ほぼ中央で２基の地床炉を検出した（ＳＩ01ＳＦ01、ＳＩ01ＳＦ02）。北側に位置するＳＩ01ＳＦ01は焼土径32×42㎝で被熱深度５㎝である。南側に位置するＳＩ01ＳＦ02は焼土径40×40㎝で被熱深度６㎝である。検出位置から考えると小鍛冶等を行っていた可能性も考えられる。
＜出土遺物＞縄文土器172.3ｇ、土師器61.5ｇ、カマド支脚114.7ｇ、礫石器1660.6ｇ、鉄製品6.8ｇが出土した。そのうち、砥石（26）、刀子（33）、長頸鏃の茎と考えられる鉄製品（34）を掲載した。（34）は写真掲載した。
＜性格・年代＞前回の調査で出土したものを含めた出土遺物の年代と遺構の形態などから、奈良時代末から平安時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

第１号土坑（ＳＫ01、第４図、写真図版３）

＜位置・検出状況＞Ｈ５グリッドに位置する。前回調査で検出されていた土坑（ＲＤ19）の続きを検出した。検出面はⅢ層上層である。ＳＩ01と重複するが本遺構の方が新しい。
＜形状・堆積土＞開口部径142㎝、底部径88㎝の円形を呈する。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる形状で深さは100㎝である。堆積土は５層に分層した。堆積の様相は自然堆積である。
＜出土遺物＞縄文土器11.8ｇ、土師器96.8ｇ、鉄製品19.3ｇが出土した。そのうち土師器甕（１）、鉄製紡錘車（35）を掲載した。
＜性格・年代＞遺物の年代から奈良時代以降の遺構と考えられる。用途は不明である。

第２号土坑（ＳＫ02、第４図、写真図版３）

＜位置・検出状況＞Ｈ５グリッドに位置する。ＳＩ01掘削時、同遺構床面で黒色の円形プランを確認したため、これを別遺構と認識し精査を行った。ＳＩ01と重複するが本遺構の方が新しい。
＜形状・堆積土＞開口部径142㎝、底部径128㎝の円形を呈する。壁面は緩やかに内傾して立ち上がる形状で深さは90㎝である。堆積土は10層に分層した。堆積の様相は人為堆積である。
＜出土遺物＞縄文土器27.5ｇ、土師器279.9ｇ、鉄製品21.4ｇ、鉄滓9.0ｇが出土した。そのうち土師器甕（２）、刀子（36）を掲載した。
＜性格・年代＞遺物の年代から奈良時代以降の遺構と考えられる。用途は不明である。

第１号陥し穴状遺構（ＳＫＴ01、第４図、写真図版３）

＜位置・検出状況＞Ｈ５グリッドに位置する。ＳＩ01堆積土掘削時、同遺構床面で黒色の溝状プランを確認したため、別遺構と認識し精査を行った。ＳＩ01と重複するが本遺構の方が古い。
＜形状・堆積土＞開口部幅36㎝、底部幅８㎝、開口部長さ292㎝、底部長さ318㎝である。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる形状だが、長辺方向端部のみ内傾する形状である。深さは88㎝である。堆積土は５層に分層した。堆積の様相は自然堆積である。
＜出土遺物＞なし。
＜性格・年代＞遺構の形態から縄文時代の陥し穴としての用途が考えられる。

（2）遺物

今回出土した遺物は縄文土器中コンテナ１箱（5086.1ｇ）、土師器・須恵器・カマド支脚小コンテナ0.5箱（1072.6ｇ）、剥片石器４点（17.5ｇ）、礫石器５点（4261.3ｇ）、鉄製品６点（446.8ｇ）、羽口片２点（35.9ｇ）、鉄滓小コンテナ１箱（4168.1ｇ）である。選択基準としては、土器・石器はおよそ形状が分かるもの、時期を特定できるものを抽出した。鉄製品と羽口は全点掲載した。なお表採遺物の出土地点は、以下のとおりに仮称し分類を行った。

・グリッドＹ軸３以西を西斜面
・グリットＹ軸４から６グリッドを丘陵頂部
・グリットＹ軸７から15グリッドを東斜面上部
・グリッドＹ軸16から22グリッドを東斜面中部
・グリッドＹ軸23以東を東斜面下部

土師器（１～６）遺構堆積土および遺構外のⅠ～Ⅱ層から出土した。出土した土師器は全てロクロを用いないで成形されていた。１はＳＫ01から出土した甕の口縁部下部から胴部の破片である。口縁部に明瞭なヨコナデが施されている。２はＳＫ02から出土した小型の甕である。口縁部は「く」の字状に短く立ち上がる。胴部外面にミガキとヘラナデの中間的な太さの道具による調整が施されている。３～６は遺構外から出土した。３～５は赤彩された甕または壺の破片で、４、５は極小片のため写真掲載とした。３は口縁部片で口唇部から外面に赤彩されている。外面は赤彩後ヘラナデによる調整が施されている。４も口縁部片で線状の赤彩が確認された。５は部位が判らないが赤彩が施されているのが確認された。６は内面黒色処理された坏の口縁部破片で、内外面ともにミガキ調整が施されている。１、２は８世紀後半から９世紀に、３～６は８世紀代に属する可能性がある。

須恵器（７～11）全て遺構外のⅠ～Ⅱ層から出土した。７、８は広口壺の胴部破片で、同一個体とみられる。７は底部近くの胴部片で、回転ヘラケズリの後、縦方向のヘラケズリが施されている。９は小型壺の肩部破片で、外面に自然釉が付着し、胎土がきめ細かい特徴がある。７、８は９世紀前半に属すると考えられ、９も同時期に属する可能性がある。10、11は甕の胴部破片であるが、小片のため詳細な時期は不明である。

縄文土器（12～24）調査区東斜面Ⅲ～Ⅳ層から主に出土した。文様は沈線による区画文が施されるものが大半を占める（12～15、18、19、23）。それに加えて隆帯や刺突が施されるもの（17、20、21、22）がある。これらは大木９式段階の特徴を持っており、縄文時代中期後葉に属するとみられる。また16、24は地文のみの胴部下半の破片であるが、出土地点や文様の特徴からこの２点も他の縄文土器と同時期のものと推定される。

弥生土器（25）Ｔ９から出土した深鉢または甕の胴部片である。弥生時代後期のものと考えられ、赤穴式の可能性がある。なお前回の調査においても弥生土器が若干量出土している（岩埋文1998）。

石器（26～32）主に東斜面Ⅰ層から出土した。器種は砥石１点、石鏃２点、石匙１点、剥片１点、磨石４点である。剥片と小片の磨石１点以外の７点を掲載した。26はＳＩ01カマド袖芯材に転用されていた。

鉄製品（33～38）遺構堆積土および遺構外のⅠ層から出土した。36はＳＫ02から出土した刀子で、刃身の先端が欠損している。刀身に強い反りがみられ、柄は曲線的に加工されている。同様の特徴をもつ刀子として、岩手県宮古市松山館跡の平安時代の土坑から出土した刀子を挙げることができる（岩埋文2014）。また当事業団が発掘調査を行い、現在報告書作成中である宮古市荷竹日向Ⅰ遺跡におい

ても、やはり平安時代の遺構から同様の刀子が多数出土している。37は刃身に厚みがある片刃の刃物である。鉈のような形状をしているが、刃身の先端が尖っており、ものを突き刺す用途も想定される。このように37は、刀と鉈の機能を併せもつ可能性があるため山刀に分類した。また刃身に厚みがあることから近世アイヌマキリとの類似を指摘することもできる（関根2014）。口金の内側には僅かに木材が残存していた。

羽口（39、40）遺構外から２点出土した。いずれも小片のため図示せず写真掲載としたが、想定される径は細い。

鉄滓　ＳＫ02から9.0ｇ、Ｔ29、Ｔ33～35から4159.1ｇ出土している。Ｔ29、Ｔ32～35から出土した鉄滓は精錬滓の可能性がある。

５　まとめ

今回の調査範囲は平成９年度調査区に北接する地域であり、遺跡範囲全体の北端部に位置する。遺跡範囲全体が南北に連続する丘陵の南端部に相当するが、今年度調査区の地形は中央を尾根頂部とし、その東西を急斜面とする地形であった。前回調査では尾根頂部からの落ち際に相当する緩斜面に造られた古墳と馬墓の展開を認めることができたが、今回の調査では同様の遺構群の分布を確認することはできなかった。今年度調査で検出することができた遺構はいずれも尾根頂部に限定されており、全時代を通じ北向きの急斜面側には遺構が存在しない様相を確認できた。尾根頂部で検出された竪穴住居跡（ＳＩ01）は奈良時代末から平安時代前期の遺構であり、丘陵中央部から山田湾を望む南斜面へと展開した古墳群に関連する施設である可能性が高い。

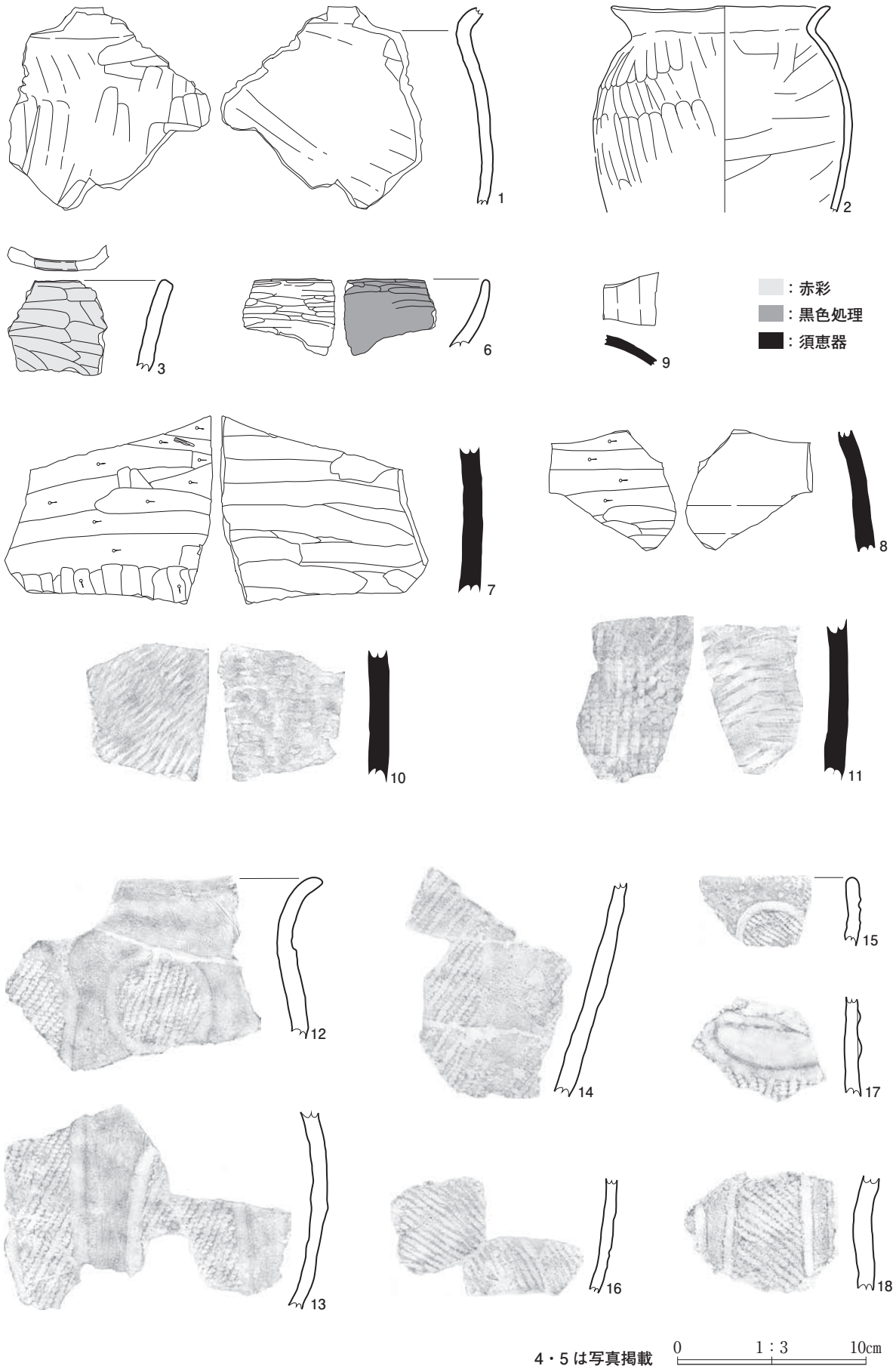
今年度調査区尾根頂部の平坦面から北側に連続する遺跡範囲外の平場では、ＳＩ01の検出時と同様の方形の落ち込みを確認することができた。宮古・山田地区の丘陵上に立地する集落遺跡では尾根頂部の狭隘な平場に沿うように竪穴住居跡が展開する傾向が指摘されており、本遺跡においても同様の遺構配置がみられる可能性がある。

また、東斜面下部に位置する第33号トレンチに残された薄いⅢ層内で少量の鉄滓（1157.8ｇ）の集合を確認することができた。斜面上方に製鉄遺構が存在する可能性を想定し、第32号トレンチを入れたが、同所は近接する道路造成に伴う削平を受けており、Ⅴ層直上が厚い造成土（Ⅰ層相当）という状況であった。今回の調査で遺構を検出することはできなかったが、同所付近に製鉄関連遺構があった可能性は指摘しておきたい。

なお、房の沢Ⅳ遺跡平成27年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

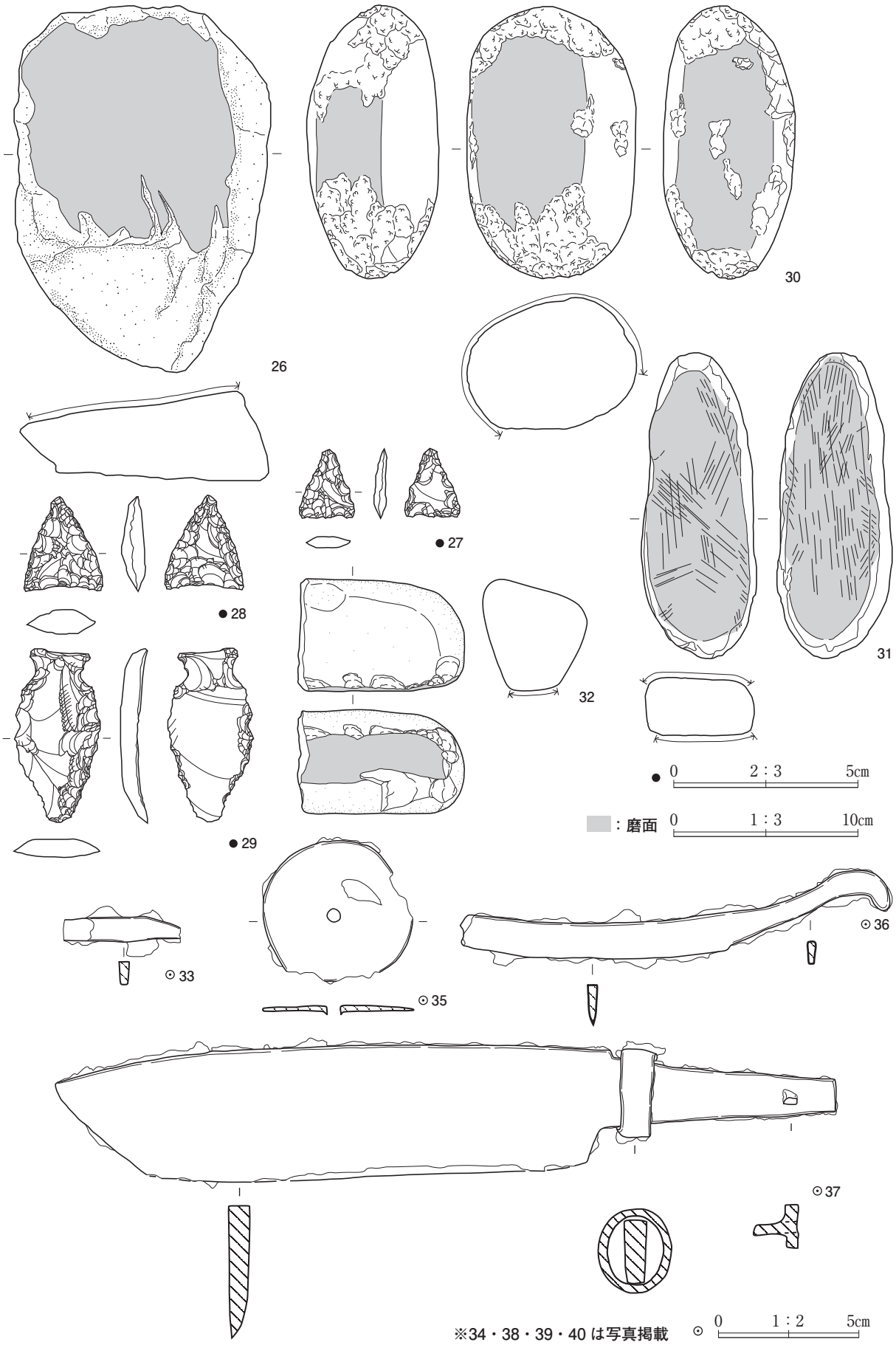
＜引用・参考文献＞

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1998
『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第287集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2014
『松山館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第625集
関根達人　2014　『中近世蝦夷地と北方交易　アイヌ文化と内国化』吉川弘文館



第５図　出土遺物（１）

第６図　出土遺物（２）


26
30
31
● 27
● 28
● 29
32
33
35
36
37
● 0　2：3　5cm
：磨面　0　1：3　10cm
※34・38・39・40 は写真掲載
⊙ 0　1：2　5cm

第７図　出土遺物（３）

第1表　土器観察表

No.	出土地点	層位	種別	器種	部位	計測値(cm)			文様・調整		備考
						口径	器高	底径	外面	内面	
1	SK01	堆積土下部	土師器	甕	口～胴	—	［10.15］	—	口：ヨコナデ 胴：ヘラナデ	口：ヨコナデ 胴：ヘラナデ	内面コゲ付着、 やや摩耗
2	SK02	堆積土中位	土師器	甕	口～胴	11.55	［10.90］	—	口：ヨコナデ 胴：ミガキorヘラナデ	口：ヨコナデ 胴：ヘラナデ	外面スス・内面コゲ 付着、胎土粗い、摩耗
3	T17	表土	土師器	甕or壺	口縁部	—	［4.90］	—	ヘラナデ	ヘラナデ	口唇～外面赤彩
4	6L	表土	土師器	甕or壺	口縁部	—	［3.10］	—	ナデ	ナデ	赤彩、写真掲載
5	西斜面	表採	土師器	甕or壺	不明	—	［1.80］	—	—	—	赤彩、写真掲載
6	西斜面	表採	土師器	坏	口縁部	—	［4.00］	—	ミガキ	ミガキ・ 黒色処理	
7	T14	暗褐色土	須恵器	広口壺	胴部	—	［9.90］	—	回転ヘラケズリ →ヘラケズリ	ヘラナデ	8と同一個体
8	7H	表土	須恵器	広口壺	胴部	—	［6.40］	—	回転ヘラケズリ	回転ナデ	7と同一個体
9	西斜面	表採	須恵器	壺	肩部	—	［0.70］	—	回転ナデ	回転ナデ	自然釉付着
10	T27	黒褐色土(表土)	須恵器	甕	胴部	—	［7.00］	—	タタキ	アテグ痕	
11	T31	黒褐色土(表土)	須恵器	甕	胴部	—	［8.50］	—	タタキ	アテグ痕	
12	T17	暗褐色土下位	縄文土器	深鉢	口～胴部	—	［8.50］	—	RLR縦、沈線による区画文、磨消	ナデ	13・14と同一個体
13	T17	暗褐色土下位	縄文土器	深鉢	胴部	—	［10.40］	—	RLR縦、沈線による区画文、磨消	ナデ	12・14と同一個体
14	T17	暗褐色土下位	縄文土器	深鉢	胴部	—	［11.70］	—	RLR縦、沈線による区画文、磨消	ナデ	12・13と同一個体
15	T18	表土～黒褐色土	縄文土器	深鉢	胴部	—	［3.65］	—	RL横、沈線による区画文、磨消	ナデ	
16	T18	暗褐色土下位	縄文土器	深鉢	胴部	—	［6.10］	—	RL横	ヘラナデ	
17	T25	暗褐色土	縄文土器	深鉢	胴部	—	［5.30］	—	RL斜、隆帯、磨消	ナデ	
18	T30	黒褐色土(表土)	縄文土器	深鉢	胴部	—	［6.10］	—	LR縦、沈線による区画文、磨消	ナデ	
19	T33	暗褐色～褐色土 (表土、造成土)	縄文土器	深鉢	胴部	—	［5.80］	—	RL縦、沈線による区画文、磨消	ナデ	
20	T32	Ⅳ層	縄文土器	深鉢	口～胴部	—	［42.70］	—	RLR縦・斜、隆帯、沈線による区画文、磨消	ナデ	
21	T33	暗褐色～褐色土 (表土、造成土)	縄文土器	小型深鉢	口～底部	(16.80)	19.50	7.30	LR縦、渦巻き隆帯、沈線による区画文、磨消、刺突	ナデ	
22	T34	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	［4.05］	—	RL横、隆帯、沈線による区画文、磨消	ナデ	
23	T35	盛土	縄文土器	深鉢	胴部	—	［5.10］	—	RL縦、沈線による区画文、磨消	ナデ	外面スス、 内面コゲ付着
24	東斜面	表採	縄文土器	深鉢	胴部	—	［9.30］	—	LRL横	—	
25	T9	暗褐色	弥生土器	甕？	胴部	—	［3.10］	—	RL撚糸文	—	赤穴式か

［　］は残存値、(　)は推定値

第2表　石器観察表

No.	出土地点	層位	器種	最大計測値(cm)			重量(g)	石質	備考
				長さ	幅	厚さ			
26	SI01 カマド	燃焼部	砥石	19.80	13.80	4.80	1660.6	花崗岩、中生代白亜紀、北上山地	カマド袖芯材に転用
27	T14 10G	黒褐色土	石鏃	1.80	1.50	0.35	0.7	頁岩、中生代、北上山地	
28	T23	表土	石鏃	2.50	2.10	0.65	2.5	頁岩、中生代、北上山地	
29	T24	黒褐色土	石匙	4.65	2.35	0.75	6.0	頁岩、中生代、北上山地	
30	東斜面中部 北端	表採	磨石	14.70	9.10	7.10	1415.6	花崗閃緑岩、中生代白亜紀、北上山地	敲き痕あり
31	東斜面中部	表採	磨石	16.45	6.20	3.10	592.6	ホルンフェルス、 中生代(変成は中生代白亜紀)、北上山地	
32	東斜面下部	表採	磨石	6.00	［9.00］	5.60	492.8	花崗岩、中生代白亜紀、北上山地	

［　］は残存値

第3表　鉄製品・羽口観察表

No.	出土地点	層位	器種	最大計測値(cm)			重量(g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
33	SI01　北東	埋土下部	刀子柄部	［4.20］	［0.90］	［0.40］	3.5	
34	SI01 カマド左脇	床面	長頸鏃茎?	［5.60］	［0.50］	［0.10］	3.3	写真掲載、内部空洞
35	SK01	埋土下部	紡錘車	5.30	5.40	0.30	19.3	
36	SK02	埋土下部	刀子	［15.40］	1.40	0.30	21.4	
37	T03 2O	暗褐色土(表土)	山刀	28.00	4.70	0.80	381.0	片刃
38	14H	黒褐色土(表土)	不明	［4.40］	［1.10］	［0.30］	6.2	写真掲載
39	11H	表土	羽口	［1.80］	［3.90］	［1.45］	12.1	写真掲載
40	T34	Ⅲ層	羽口	［4.80］	［4.10］	［1.30］	23.8	写真掲載、外面鉄滓付着

［　］は残存値

刃類No.36、37の幅・厚さは刃身の計測値

遺跡遠景（直上・北から）

遺跡遠景（北東から）

写真図版１　調査区遠景

丘陵頂部調査前状況（北から）

丘陵頂部調査終了（北から）

東斜面調査前状況（東から）

東斜面調査終了（東から）

ＳＩ01完堀（南から）

写真図版２　調査前状況・調査終了・SI01（１）

SI01・SK01B-B'断面（南から）

SI01A-A'断面（西から）

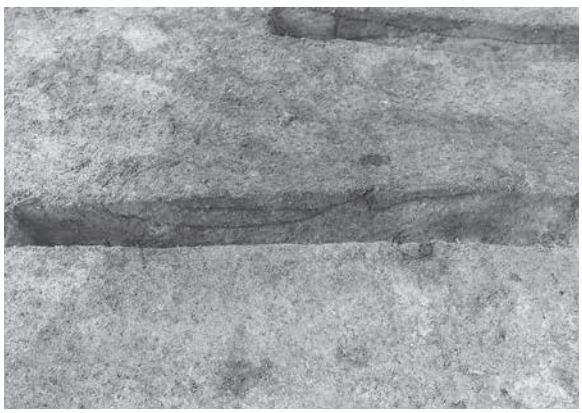
SI01カマド検出（南から）

SI01カマドE-E'断面（南から）

SI01カマドF-F'断面（南から）

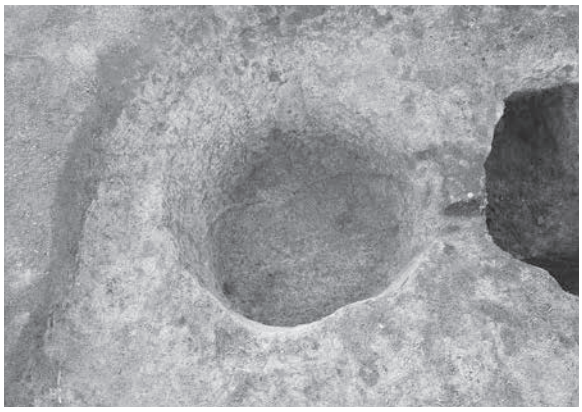
SI01SF01SI01SF02検出（東から）

SI01SF01G-G'断面（南東から）

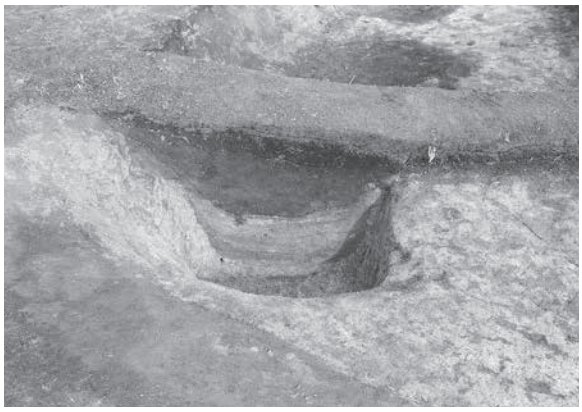


SI01SF02H-H'断面（南東から）

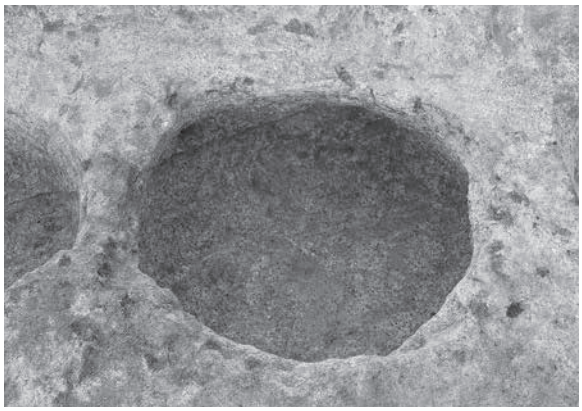
写真図版３　SI01（２）



SK01完堀（東から）



SK01断面（南から）



SK02完堀（東から）

SK02断面（東から）

SKT01完堀（南から）

SKT01断面（南から）

東斜面上部作業風景（東から）

T32断面（南から）

写真図版４　SK01・02・SKT01・作業風景・T32

赤彩
1～3・6～22　S＝1／3
4・5　S＝2／3
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22

写真図版５　出土遺物（１）

23～26・30～32　S＝1／3
27～29　S＝2／3
33～40　S＝1／2

写真図版６　出土遺物（２）

（3）白石（しろいし）遺跡

所　在　地	上閉伊郡大槌町吉里々々第９地割地内	**遺跡コード・略号**	MG23-1279・SR-15
委　託　者	国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所	**調査対象面積**	550㎡
事　業　名	三陸沿岸道路	**調査終了面積**	550㎡
発掘調査期間	平成27年７月６日～７月24日	**調 査 担 当 者**	米田　寛

１　発掘調査に至る経過

白石追跡は、三陸沿岸道路「釜石山田道路」の道路改築事業に伴い発掘調査を実施することとなった遺跡のうちの一つである。

「釜石山田道路」は、釜石市甲子町（釜石JCT（仮））から山田町船越（山田南IC）を結ぶ延長約23㎞の自動車専用道路であり、この区間のうち、釜石両石IC～釜石北IC間（延長約4.6㎞）は平成23年３月５日に供用している。当該区間の現道国道45号には「恋の峠」という急勾配、急カーブの交通の難所があり、この難所の早期解消を目的に先行整備を行い、平成23年３月11日の東日本大震災６日前（H27.3.5）に、開通した通路は鵜住居地区の小学校・中学校の生徒等570名の津波からの避難場所、避難経路として機能した。

釜石山田道路をはじめ既に供用していた区間は、東日本大震災において救助・救援や支援物資の輸送など「命の道」としての機能を発揮したことはもとより、今後の整備区間とともに早期復興への貢献、現道の溢路・交通混雑の緩和；地域間交流の促進や地域の産業・経済・観光等への貢献、さらには、救急医療施設への搬送時間の短縮等により地域の安全・安心の確保に資するものである。

平成27年度の埋蔵文化財の発掘調査については、岩手県教育委員会事務局と協議を重ね、岩手県教育委員会委員長から平成27年２円24日付けで（公財）岩手県文化振興事業団と「田屋遺跡、迫田Ⅰ遺跡、小白浜Ⅰ遺跡の発掘調査と松磯遺跡の報告書刊行」について契約事務を取り進めるように通知があり、平成27年４月13日（国交省の暫定予算成立後）付けで発掘調査に係る委託契約を締結、調査を開始したものであるが、平成27年５月末に発掘調査可能となった白石遺跡について追加発掘調査を依頼し実施したものである。　（国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所）

1：25,000　大槌

第１図　遺跡位置図（１）

2　遺跡の位置と立地

遺跡は、ＪＲ山田線旧浪板駅から北西へ約300ｍの緩斜面地に位置する。遺跡背後の鯨山（標高610ｍ）から注ぐ沢流路によって形成された小支谷に集落が点在しており、本遺跡もそうした小支谷の谷底地形に広がる造成面に立地する。調査区現況は造成された宅地と休耕地であった。

3　基本層序

Ⅰ層　黒褐色土（50～150㎝）盛土及び水田耕作土等の造成土を一括した。

Ⅱ層　黒褐色土（０～50㎝）耕作以前の表土層にあたる。現代ゴミを包含する。

Ⅲ層　褐 色 土（層厚不明）基盤層で、上面を最終遺構検出面とした。

4　調査の概要

（1）遺構

調査は上述の基本層序に従い、重機によりⅠ～Ⅱ層を掘削し、Ⅲ層上面で遺構検出を行った。その結果、時期不明の溝跡１条を確認した。

１号溝跡

調査区西側の沢状地形範囲を、人工的な溝跡の可能性の遺構として調査を行った。鯨山から注ぐ沢跡の可能性が高いが、調査区が狭く判断を保留せざるを得ず、溝跡と暫定的に登録して調査を進めた。堆積土内に発砲スチロールなどが混入していることから、完全に埋没したのは現代で、開削時期は不明である。なお、国土地理院1977年空中写真等で、田面造成時に区画された水路らしき痕跡が確認できる。本遺構範囲に該当する可能性があるが、画像が粗く判断できない。調査区内規模は、長さ20.93m、開口部幅8.70ｍである。底面～堆積土下部にかけて、花崗岩巨礫を包含する。土砂崩れ時に混入したと考えられる。

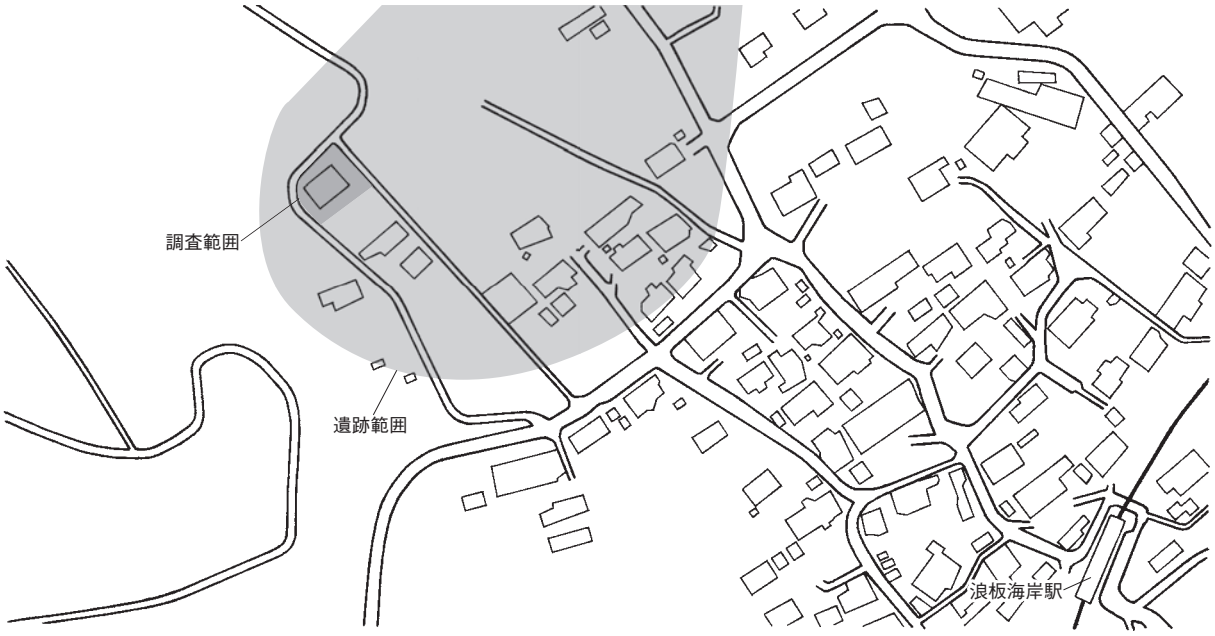
（2）遺物

現代よりも古い遺物は、今回の調査区では出土しなかった。

5　まとめ

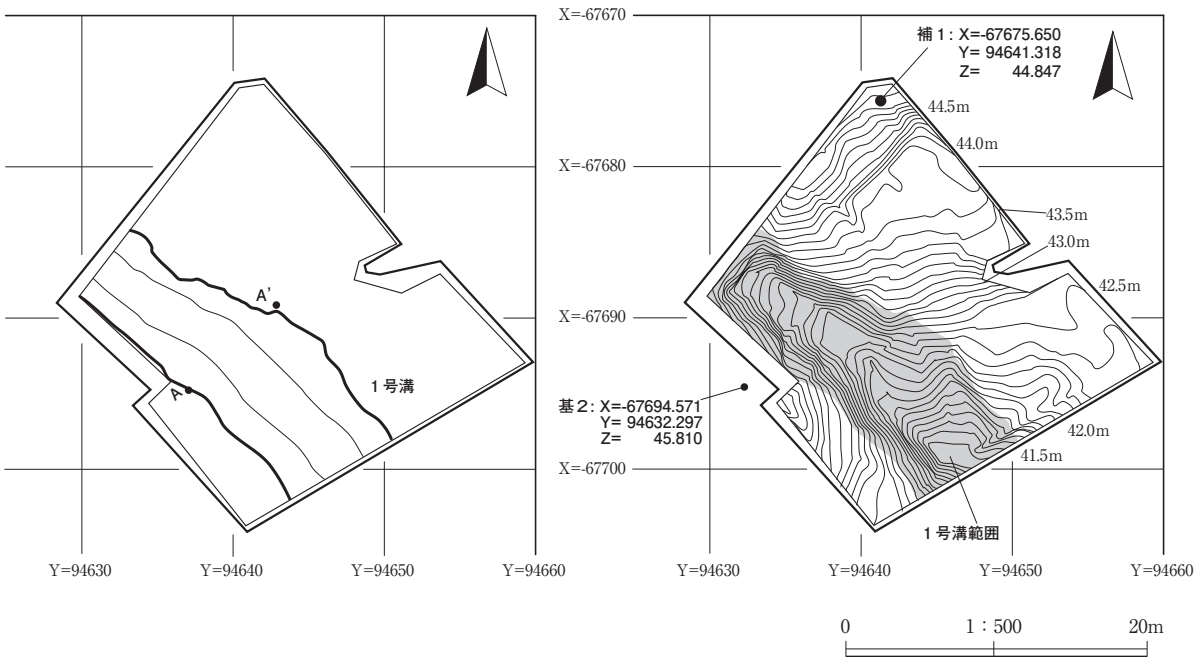
今回の調査で沢跡の可能性のある溝跡１条を検出した。今後、周辺範囲の調査が行われれば、本遺跡の時代や性格が明確になると期待する。

なお、白石遺跡平成27年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

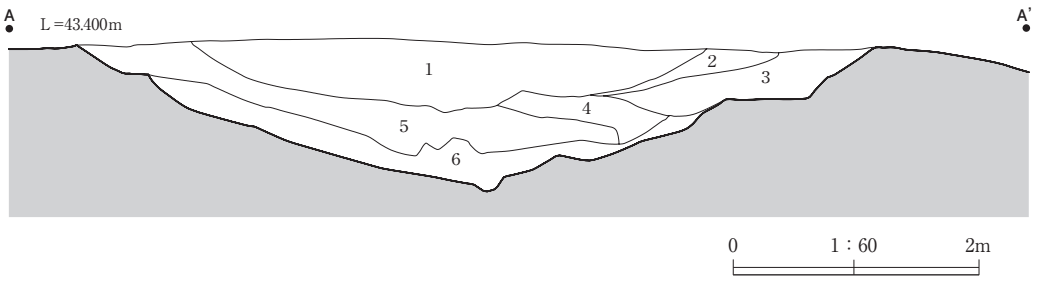


縮尺約1：3,000

第２図　遺跡位置図（２）



第３図　遺構配置図及び調査範囲の微地形図



1　10YR1.7/1　黒色土　粘性：弱　しまり：やや密　現代ゴミ含む、風化花崗岩粒10%
2　10YR1.7/1　黒色土　粘性：弱　しまり：やや粗　現代ゴミ含む、風化花崗岩粒５%
3　10YR2/2　黒褐色土　粘性：やや弱　しまり：やや粗　川砂（粗）10%
4　10YR4/3　にぶい黄褐色砂　粘性：なし　しまり：粗（地山の崩落土であろう）
5　10YR2/1　黒色土　粘性：弱　しまり：粗　風化花崗岩粒５%
6　10YR3/1　黒褐色土　粘性：弱　しまり：粗　礫φ1cm５%、粗砂10%

第４図　１号溝跡断面図

1号溝跡断面（南東から）

1号溝跡近景（北西から）

調査区完掘（北東から）

写真図版1　白石遺跡

Ⅱ　発掘調査概報

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30㎝

中コンテナ：42×32×20㎝

小コンテナ：42×32×10㎝

（4）中村（なかむら）遺跡

所　在　地　北上市二子町字中村42ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事　業　名　北上川中流部緊急治水対策事業（二子地区）
発掘調査期間　平成27年４月16日～７月２日
調査終了面積　3,580㎡
調 査 担 当 者　高木　晃・伊東　格・清水　彩・佐藤奈津季
主 要 な 時 代　奈良・平安

1：50,000　北上

遺跡の立地

遺跡は南流する北上川の西岸に形成された自然堤防上に立地し、標高は60m前後である。当該事業に係る発掘調査は平成26年度から開始され、本年度は遺跡の北端を対象として実施した。

調査の概要

検出遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡34棟、掘立柱建物跡１棟、土坑３基、焼成遺構19基、溝跡４条、焼土２基、柱穴状小土坑37個である。調査区北端から南端まで同密度で遺構群が分布しており、千苅遺跡から連なる８～９世紀代集落跡の全体像がほぼ判明した。出土遺物は奈良～平安時代の土師器・須恵器24箱、石器類、金属製品各１箱である。なお、中村遺跡全体では竪穴住居跡135棟、掘立柱建物跡４棟、土坑137基、焼成土坑73基、溝跡19条、他の検出数となる。

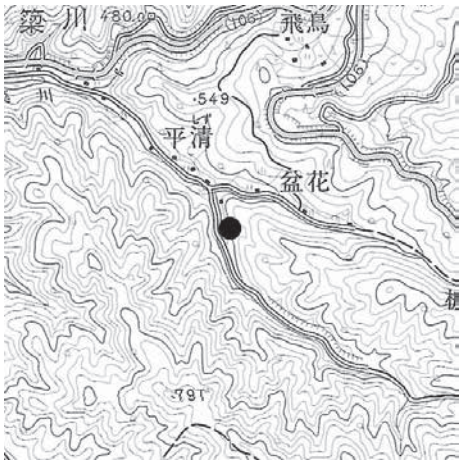
調査区

大型の竪穴住居跡精査状況

煙道側壁に石列を設置するカマド

住居跡床面土師器出土状況

（５）盆花（ぼんはな）遺跡



1：50,000　早池峰山

所　在　地　盛岡市簗川第１地割74-2地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事　業　名　宮古盛岡横断道路区界道路
発掘調査期間　平成27年７月２日～８月７日
調査終了面積　910㎡
調査担当者　高木　晃・伊東　格・佐藤奈津季
主要な時代　縄文

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市南東部、簗川の上流域にあり、ＪＲ山田線区界駅の西北西約2.5㎞に位置する。栃沢の支流に落ち込む尾根末端部の地滑り地形の緩斜面に立地し、崖錐性堆積物が広範囲に分布する。調査区の標高は480m前後を測る。調査前は山林となっていた。

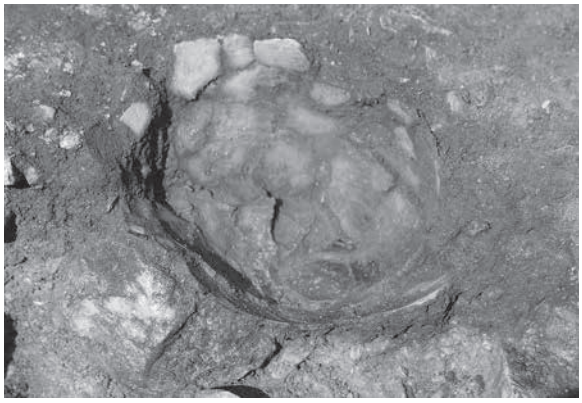
調査の概要

調査の結果、尾根末端部の緩斜面に縄文時代後期後葉を中心とした小規模な集落跡を確認した。検出遺構は、縄文時代後期後半の竪穴住居跡４棟、土坑17基、焼土５基、埋設土器１基、柱穴状土坑31個、遺物包含層１箇所である。出土遺物は、縄文時代後期から晩期の土器が大コンテナ３箱、石器が約20点である。また、遺構外から縄文時代早期前葉の沈線文系土器が出土した。

調査区遠景

作業風景

竪穴住居跡



埋設土器出土状況

（6）新里愛宕裏遺跡（にいさと あたごうら）

所　在　地　遠野市綾織町新里31地割41-2ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事　業　名　東北横断自動車道釜石秋田線建設事業
発掘調査期間　平成27年９月１日～11月13日
調査終了面積　2,400㎡
調 査 担 当 者　高橋義介・南野龍太郎・藤田崇志
主 要 な 時 代　縄文・古代

1：50,000　遠野

遺跡の立地

遺跡は、JR釜石線の遠野駅より南西へ約1.8㎞にあり、猿ヶ石川左岸の丘陵に立地している。標高は287～296m前後である。現況は雑木林と広域基幹林道（土室線）の一部である。平成26年度に3,000㎡の発掘調査が実施され、縄文時代中期～後期の集落跡をはじめとするフラスコ状土坑や陥し穴状遺構等を確認している。今年度は隣接する地区の継続調査であるが、林道工事に伴う削平や盛り土箇所が多くを占めている。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期～後期の土坑18基、陥し穴状遺構５基、焼土１基、柱穴状土坑４個、古代の竪穴住居状遺構１棟である。土坑は７基がフラスコ状土坑で、中には遺棄された縄文土器や焼土の堆積が見られるものもある。陥し穴状遺構の平面形状は、隅丸長方形と楕円形に分類される。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ３箱、石器類中コンテナ２箱、土製耳飾、土玉、鐸形土製品、ミニチュア石斧、鉄鏃、鉄釘、銭貨（寛永通宝）等である。

古代の竪穴住居状遺構完掘

陥し穴状遺構埋土断面

フラスコ状土坑遺物出土状況

（7）西平内（にしひらない）Ⅰ遺跡

1：50,000　階上岳

所　在　地　九戸郡洋野町種市第37地割地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年４月20日～10月２日
調査終了面積　2,250㎡
調 査 担 当 者　濱田　宏・川村　均・藤田崇志
主 要 な 時 代　縄文

遺跡の立地

遺跡は、九戸郡洋野町種市第37地割地内、洋野町役場から西北西４㎞付近に位置し、北流する渋谷川南岸の丘陵上に立地する。遺跡の標高は62.2～63.5ｍで、調査区は雑木が生い茂る山林に深く囲まれる。

調査の概要

２年目を迎えた今年度は、墓と想定した縄文時代後期初頭から前葉の配石遺構群（外帯）の精査と、その内側に弧状に巡る石列（内帯）の性格を明らかとすることを主目的とした調査を実施した。その結果、外帯を構成する配石遺構には下部に埋葬施設と思われる土坑を伴うものと、土坑を伴わず礫が据えられた凹みが複数認められるだけの２種が存在することが明らかとなったが、墓と決定づけられる人骨等は出土せず、副葬品とも思える土器片や石鏃・石斧などが出土するにとどまった。一方、内帯の内部からは柱穴状の小土坑が２基確認されたのみであり、北側の調査区域外にこれに関する何らかの遺構が存在するものと考えられる。この他の検出遺構には、竪穴住居跡５棟、竪穴住居状遺構１棟、掘立柱建物跡５棟、土坑26基、炉10基、焼土６基、埋設土器４基などがあり、これらは主に内帯と外帯間に検出されている。

遺物は、昨年度同様縄文時代後期初頭から前葉を主体とする壺形や深鉢形の土器と、祭祀に関わる土製品（鐸形・土製円盤など）や石製品（石刀・石製円盤など）が出土した。中でも、昨年度の調査では見つかっていなかった当該期の土偶が数点出土したほか、ヒスイ製の垂飾品が外帯の一角から１点確認され、本遺跡の配石遺構（外帯）が集団墓地であった可能性を残すこととなった。併せて、内帯とした弧状の石列は外帯のような石の集合体としては捉えられず、その性格や機能が異なると考えられる。また、今次の調査では内帯の石列よりも確実に古い竪穴住居跡が検出されており、配石遺構構築以前の状況を考察する上で良好な成果も得られている。

霧に煙る配石遺構群

現地公開の様子

（8）北鹿糠（きたかぬか）遺跡

所　在　地　九戸郡洋野町種市第17地割字北鹿糠地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年10月１日～11月11日
調査終了面積　5,300㎡
調 査 担 当 者　久保賢治・濱田　宏・久保友咲
主 要 な 時 代　縄文

1：50,000　階上岳

遺跡の立地

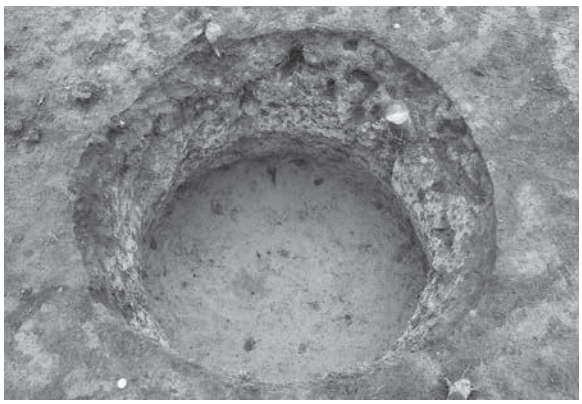
遺跡は、洋野町役場から南西方向に直線で約1.8㎞の山地に位置している。調査区は南に傾斜した緩斜面地にあり、標高は約50～70ｍを示す。調査以前は樹齢100年ほどの杉林であった。本遺跡は平成12年に当センターで調査を実施したゴッソー遺跡、南側に今年度調査を実施した南鹿糠Ⅰ遺跡と隣接する。

調査の概要

調査区からは縄文時代のものと考えられる陥し穴状遺構５基、土坑５基を検出した。陥し穴状遺構は全てが溝状であり、一部に重複がみられた。土坑は食糧貯蔵用と考えられるフラスコ状土坑１基と性格不明の土坑４基である。出土遺物は縄文土器片が0.1箱（大コンテナ）、石器類が0.5箱（中コンテナ）である。

調査区全景

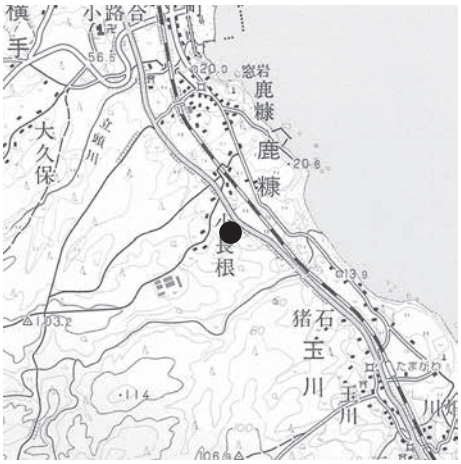
陥し穴状遺構検出状況


フラスコ状土坑全景

陥し穴状遺構全景

（9）南鹿糠（みなみかぬか）Ⅰ遺跡

所　在　地　九戸郡洋野町種市第16地割字南鹿糠
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年４月16日～６月12日
　　平成27年９月14日～９月25日
調査終了面積　4,420㎡
調 査 担 当 者　久保賢治・高橋義介・古舘貞身・伊東　格
　　久保友咲
主 要 な 時 代　縄文



1：50,000　階上岳

遺跡の立地

遺跡は洋野町役場から南西方向に直線で約２㎞、国道45号線西側の山地に位置している。標高は約40～60mを示し、調査区は南北に長い長方形を呈している。調査区全体が南から南東方向に傾斜した緩斜面地であり、調査以前は樹齢40～60年ほどの杉林であった。本遺跡は平成12年に当センターで調査を実施したゴッソー遺跡、北側に今年度調査を実施した北鹿糠遺跡と隣接する。

調査の概要

調査は期間をおいて２回実施された。調査面積は１回目4,200㎡、２回目220㎡である。

調査区からは縄文時代前期の集落の一部である竪穴住居跡が２棟、時期不明の陥し穴状遺構５基、土坑２基を検出した。竪穴住居跡２棟は調査区東側の太平洋側へ傾斜している緩斜面地で検出され、一部が重複した状態であった。ゆるやかな壁の立ち上がりと壁柱穴を確認できた。陥し穴状遺構は５基検出され、そのうち４基は溝状、１基は円形であった。土坑は食糧貯蔵用と考えられるフラスコ状土坑１基と時代時期不明の土坑１基が検出された。

出土遺物は、縄文土器片が１箱（大コンテナ）、石器類が３箱（中コンテナ）、コハク片２点である。

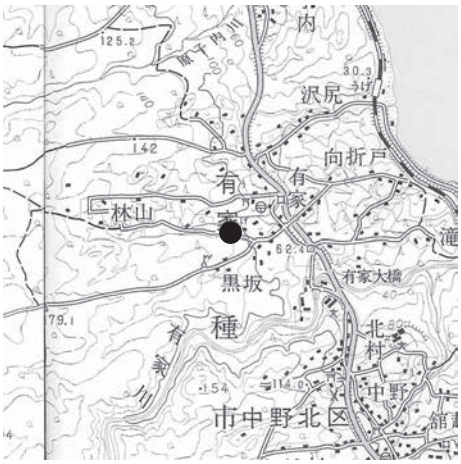
今回の調査から南鹿糠Ⅰ遺跡は、縄文時代前期の集落と狩り場（時期不明）であることが明らかとなった。

重複する竪穴住居近景

陥し穴状遺構全景

(10) 上（うえ）のマッカ遺跡

所　在　地　九戸郡洋野町種市有家第６地割字当座屋敷
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年６月15日～９月24日
調査終了面積　3,700㎡
調査担当者　久保賢治・高橋義介・久保友咲・伊東　格
古舘貞身
主要な時代　縄文



1：50,000　久慈

遺跡の立地

遺跡はＪＲ八戸線有家駅から約1.2㎞南西の丘陵地に位置し、太平洋を遠望することができる。調査区は東から北東にかけて傾斜した緩斜面地で標高は約90～100ｍを示す。調査以前は畑地として使用されていた。

調査の概要

検出遺構は縄文時代前期の竪穴住居跡１棟、中期の竪穴住居跡３棟、土坑25基、焼土遺構３基である。調査区東側から集中して検出された。畑地であったため土壌は撹拌されており遺構の残存状態は良くないが、一部の竪穴住居跡からは二重に周る壁溝や石囲炉、埋設土器が見つかった。

出土遺物は縄文土器13箱（大コンテナ）、石器11箱（中コンテナ）、コハク片２点、寛永通宝１点である。土器は主に縄文時代中期の円筒上層土器であるが、縄文時代前期や後期のものも出土した。

遺跡遠景

（11）中平（なかたい）遺跡

所　在　地　九戸郡野田村大字野田第13地割84-91ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年８月３日～11月６日
調査終了面積　5,200㎡
調 査 担 当 者　北田　勲・伊藤　武・大坪華子
主 要 な 時 代　縄文・奈良・平安

1：50,000　陸中野田

遺跡の立地

遺跡は、野田村役場から南西約800ｍに位置しており、明内川と泉沢川によって形成された河岸段丘上に立地している。現況は畑地・宅地で、標高は21.5～24.5ｍである。

調査の概要

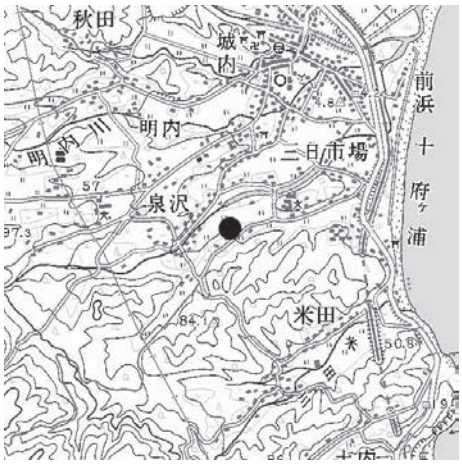
昨年度に引き続き、２ヵ年目の調査である。検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構50基、古代の竪穴住居跡12棟・円形周溝１基・方形周溝１基・溝跡２条、古代以降の掘立柱建物跡５棟・土坑２基・溝跡２条・柱穴状土坑249個、出土遺物は縄文時代の石匙１点、古代の土師器大コンテナ３箱・須恵器ビニール１袋・羽口２点・紡錘車３点・土玉１点・黒曜石製剥片１点・木製品１点・鉄製品９点・鍛造剥片ビニール小１袋・鉄滓ビニール１袋・貝殻ビニール１袋・コハク18点である。

昨年度と合わせて、縄文時代の狩り場と古代の集落が広がっていることが分かった。次年度以降も調査を継続する予定である。

調査区全景（右が北）

(12) 上泉沢（かみいずみさわ）遺跡

所　在　地　九戸郡野田村大字野田第12地割94-4地先
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年９月１日～９月17日
調査終了面積　300㎡
調 査 担 当 者　北田　勲・伊藤　武・大坪華子
主 要 な 時 代　縄文・古墳・奈良



1：50,000　陸中野田

遺跡の立地

遺跡は、野田小学校から南西約500ｍに位置しており、泉沢川によって形成された河岸段丘上に立地している。現況は道路で、標高は22.0～24.5ｍである。

調査の概要

昨年度に引き続き、２ヵ年目の調査である。昨年度調査区の南側に隣接する道路部分を調査し、縄文時代の陥し穴状遺構５基・土坑２基を確認した。出土遺物は、磨石１点である。２ヵ年の総遺構数は、縄文時代の陥し穴状遺構65基・土坑２基、古墳～奈良時代の竪穴住居跡７棟・土坑５基・焼土２基、時期不明のピット５基、出土遺物は縄文土器・石器ビニール各１袋、古墳～奈良時代の土師器大コンテナ１箱・石器５点・鉄製品２点・コハク２点である。

調査区の大半が道路敷設時の撹乱によって削平されていたことと、地形の変換点のために南側への遺構の広がりはなかったが、昨年度成果と同様に縄文時代の狩り場が確認された。

調査区全景（西から）

（13）乙部野（おとべの）Ⅱ遺跡

所　在　地　宮古市田老字乙部野83ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年８月３日～12月18日
調査終了面積　4,494㎡
調 査 担 当 者　松政里奈・北村忠昭・高橋　工
　　佐々木隆英・森　裕樹
主 要 な 時 代　縄文・弥生

1：50,000　田老

遺跡の立地

遺跡は、宮古市田老の国道45号道の駅たろうから南東約400mに所在する海岸段丘上に位置する。標高は126～139mで、西からのびる尾根の緩やかな南向き斜面に立地している。調査前は山林であった。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡62棟、竪穴住居状遺構６棟、焼土17基、陥し穴状遺構８基、フラスコ状土坑11基、土坑41基、柱穴状土坑107個、不明遺構４基、捨て場２箇所である。竪穴住居跡は、主に縄文時代後期初頭のものであり、ほかに縄文時代前期が４棟、弥生時代前期が３棟であった。出土遺物は、土器大コンテナ92箱、礫石器大コンテナ50箱、剥片石器大コンテナ２箱、土製品20点、石製品８点である。

今回の調査で、縄文時代前期から弥生時代までの間、断続的に集落や狩り場として利用されていたことがわかった。特に縄文時代後期初頭は、同時期の竪穴住居跡・フラスコ状土坑・捨て場が場所を分けて検出され、場の使い分けを把握することができた。また、弥生時代前期の土器が竪穴住居跡からまとまって出土している。田老地区では数少ない当該時期の調査例となったことから、貴重な資料として今後の検討が大いに期待される。

竪穴住居跡全景

フラスコ状土坑全景

遺物出土状況

(14) 高根（こうね）遺跡

所　在　地　宮古市山口11地割71ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年４月17日～12月11日
調査終了面積　5,470㎡
調 査 担 当 者　西澤正晴・河本純一・佐藤　剛・中島康佑
米田　寛・酒井野々子・久保友咲・近藤行仁
主 要 な 時 代　縄文

1：50,000　宮古

遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所から北西2.9㎞にあり、山口川に面した北上山地から続く丘陵の先端に立地する。調査地は、複数の尾根とそれに挟まれた谷部に及ぶ。標高は60～100ｍの間にあり高低差に富んでいる。調査前の状況は山林や畑地であった。これまで宮古市教育委員会によって過去に２度調査が行われており、縄文時代中期の集落や墓域として知られている。

調査の概要

今年度調査した検出遺構には、竪穴住居跡32棟、フラスコ状土坑280基、遺物包含層２箇所がある。昨年度との合計数は、竪穴住居跡65棟、フラスコ状土坑346基、遺物包含層４箇所に及び、来年度さらに増加する見込みである。各遺構は、標高60ｍの谷底から標高100ｍの尾根上部、その間の南向き急斜面上にある。谷底と頂上部との比高は40ｍもあり、この範囲に各遺構が途切れることなく広がっている。遺構の時期は、出土遺物などから、大部分が縄文時代中期に属すると考えられ、比較的狭い時間幅で展開した集落であることが判明している。急峻な地形に立地していること、数多くの貯蔵穴（フラスコ状土坑）を有することが遺跡の最大の特色であるが、これが地域的や時期的な特徴であるのか、あるいは遺跡限定の特徴であるのかなど検討する課題も多い。

また、今年度の出土遺物には、土器大コンテナ170箱、石器中コンテナ40箱（三角壕形石製品なども含む）、土製品（斧形、キノコ形を含む）、骨･貝類、コハク片など中コンテナ20箱がある。なお調査は来年度も継続して行われる予定である。

フラスコ状土坑群

石製品出土状況

（15）山口駒込（やまぐちこまごめ）Ⅰ遺跡

所　在　地　宮古市山口２丁目217ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年７月16日～12月11日
調査終了面積　3,656㎡
調査担当者　溜浩二郎・阿部勝則・菊池貴広・佐藤　剛
川村　均・白戸このみ・立花雄太郎・
河村美佳
主要な時代　縄文・古代

1：50,000　宮古

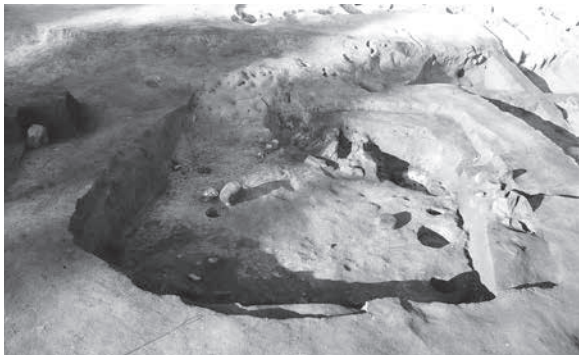
遺跡の立地

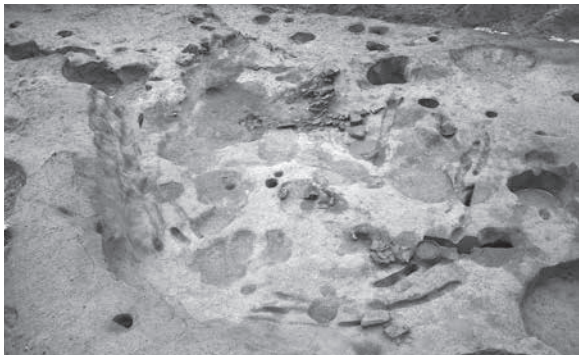
宮古市役所から西北西2.5㎞に位置し、地形的には北側から延びる丘陵地の先端部に遺跡は立地し、東西を山口川の支流蜂ヶ沢川へと合流する沢が流れている。標高は21～24mを測り、調査前の現況は畑地・水田で、土地利用の為、階段状の地形に改変されていた。

調査の概要

検出遺構は、古代が竪穴住居跡７棟、溝跡１条、縄文時代が竪穴住居跡27棟、炉・焼土25基、土坑61基、陥し穴状遺構２基、柱穴状土坑125個である。遺構は調査区内にある東西の沢に挟まれた調査区中央部分に密集して見つかっている。出土遺物は、縄文土器大コンテナ161箱、土師器・須恵器大コンテナ２箱、石器大コンテナ17箱、鉄製品12点、獣骨小コンテナ１箱である。縄文土器は前期～中期が主体で、晩期もわずかに出土している。

調査区全景（航空写真）


古代の竪穴住居跡


縄文時代の竪穴住居跡

倒立した状態で埋設されていた土器

(16) 青猿（あおざる）Ⅰ遺跡

所　在　地　宮古市近内第２地割46ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年４月20日～７月24日・９月７日～10月１日・11月４日～11月26日
調査終了面積　11,000㎡
調査担当者　阿部勝則・菊池貴広・川村　均・白戸このみ
主要な時代　古代

1：50,000　宮古

遺跡の立地

遺跡は、ＪＲ山田線千徳駅から北東約1.8㎞に位置する。調査区は、近内川とその支流によって形成された丘陵地の縁部にあり、調査区の標高は30～80ｍで、南東向きの斜面である。調査区の微地形は、地形により三つの尾根と二つの谷からなる。現況は山林である。今年度は、調査対象面積15,000㎡のうち、尾根・谷を主とする11,000㎡の調査を終了した。尾根を主とする4,000㎡については、次年度の継続調査となる予定である。

調査の概要

検出遺構は、古代の竪穴住居跡２棟、鉄生産に関連する工房跡４箇所、鍛冶炉３基、土坑33基、炭窯跡１基、焼土５基である。出土遺物は、土師器・須恵器大コンテナ２箱、石器中コンテナ１箱、鉄製品小コンテナ１箱、縄文土器・弥生土器小コンテナ１箱などである。

尾根上の平坦面から緩斜面にかけて古代の遺構が確認された。竪穴住居跡は､尾根上で確認された。１棟は、径７ｍの隅丸方形と推測され、北カマドから西カマドへのつくり替えが認められた。炭化材や焼土の検出状況から焼失した住居跡と推測される。工房跡は、斜面に平行に長軸方向を設定して竪穴状に掘り込み、壁際に等間隔に柱穴を設けている。床面では地床炉が数基確認されている。遺構の形状と出土遺物などから、鍛冶などの鉄生産に関連する工房跡の可能性がある。４棟の工房跡のうち２棟は同一地点でつくり替えられていたものである。土坑は、尾根筋の緩斜面でまとまって確認された。平面形は円形で、大きさは径１～２ｍ、深さ１～1.5ｍほどで、埋土から刀子や紡錘車などの鉄製品が出土している。いずれの遺構も古代の土地利用の様子を知ることのできる良好な資料である。

古代の鉄生産に関連する工房跡

古代の土坑群

（17）根井沢穴田Ⅳ遺跡

1：50,000　宮古

所　在　地　宮古市津軽石第19地割50-1ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年４月16日～５月15日
調査終了面積　600㎡
調査担当者　北田　勲・伊藤　武・近藤行仁・大坪華子
主要な時代　古代・中世

遺跡の立地

根井沢穴田Ⅳ遺跡は、ＪＲ山田線津軽石駅（現在休止）から南西約1.1㎞に位置しており、津軽石川に注ぐ根井沢によって形成された河岸段丘の北岸に立地している。現況は山林で、標高は23～29mである。

調査の概要

検出遺構は、古代～中世と考えられる製鉄炉４基・土坑４基・焼土１基、時期不明の溝１条・柱穴状土坑17個、出土遺物は、縄文土器ビニール小１袋、古代～中世の羽口中１箱・炉壁小１箱・鉄滓中10箱である。

調査区北側に集中して、製鉄炉４基が検出された。いずれも複数回の使用が確認でき、また重複しているため変遷を追うことが可能である。製鉄炉に伴う廃滓場は、今回の調査から確認できなかったが、斜面下方に存在する可能性がある。次年度も調査を継続する予定である。

鉄生産関連遺構群（南から）

(18) 荷竹日向（にちくひなた）Ⅰ遺跡

所　在　地　宮古市津軽石第16地割荷竹31-1ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年４月16日～５月15日
調査終了面積　3,100㎡
調 査 担 当 者　溜浩二郎・佐藤　剛・立花雄太郎・河村美佳
主 要 な 時 代　縄文・平安・中世

1：50,000　宮古

遺跡の立地

宮古市役所から南南西約9.3㎞に位置し、西側から延びる丘陵地の先端部に立地し、南側に流れる七田川との間に遺跡は広がっている。調査前の現況は畑地および山林であった。遺跡の標高は平坦部で20m、山頂部で72mを測る。昨年度からの継続調査で、今年度は昨年度未了分の3,100㎡を対象とした。

調査の概要

検出遺構は古代が竪穴住居跡11棟、土坑１基、縄文時代は陥し穴状遺構４基である。

出土遺物は竪穴住居跡から出土した土師器・須恵器が大コンテナ１箱、鉄滓小コンテナ0.5箱、縄文土器小コンテナ0.5箱である。

遺跡近景（上が北東）

（19）荷竹日影（にちくひかげ）Ⅱ遺跡

1：50,000　宮古

所　在　地　宮古市津軽石第15地割33-1ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年５月18日～７月10日
調査終了面積　2,100㎡
調 査 担 当 者　溜浩二郎・佐藤　剛・立花雄太郎・河村美佳
主 要 な 時 代　弥生・平安

遺跡の立地

宮古市役所から南南西約9.9㎞に位置し、七田川右岸の丘陵地に立地する。標高は46～54ｍと比高差がある。調査前の現況は山林で、川を隔てた北側に荷竹日向Ⅰ遺跡がある。

調査の概要

検出遺構はすべて古代で竪穴住居跡９棟、土坑４基、炭窯跡１基である。出土遺物は、弥生土器小コンテナ0.5箱、土師器・須恵器大コンテナ１箱、鉄滓大コンテナ１箱、鉄製品19点、石器３点、羽口２点である。

遺跡近景（上が北）

（20）石峠（いしとうげ）Ⅱ遺跡

所　在　地　下閉伊郡山田町石峠第２地割50ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年４月17日～８月４日
調査終了面積　3,598㎡
調 査 担 当 者　北村忠昭・松政里奈・佐々木隆英・森　裕樹
主 要 な 時 代　縄文・中世

1：50,000　津軽石

遺跡の立地

遺跡は、ＪＲ山田線豊間根駅の北北東約１㎞に位置し、荒川川左岸の丘陵裾に立地する。標高は約35～50ｍであり、調査前は畑地及び山林であった。北西側には中世城館である内館遺跡が隣接している。３年目となる今年度は、昨年度未了となった3,598㎡を対象とした。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡62棟（前期９棟・中期53棟）・竪穴住居状遺構３棟（中期）・フラスコ状土坑41基（中期）・陥し穴状遺構84基（円形・楕円形・溝状・方形）・土坑38基・焼土２基・炉１基・柱穴状土坑165個、中世の製鉄炉２基・土取り穴２箇所、古代以降の柱穴状土坑４個である。出土遺物は、縄文土器大コンテナ45箱、剥片石器大コンテナ６箱、礫石器大コンテナ233箱、土製品４点、石製品３点、鉄滓大コンテナ13.5箱、羽口・炉壁大コンテナ１箱、煙管１点等である。

今年度の発掘調査でも多数の竪穴住居跡が確認され、３カ年で合計149棟の竪穴住居跡が確認された。中でも縄文時代中期末葉には100棟を超える住居が繰り返し建てられており、当該期における中心的な集落の可能性が高い。また、これまでと同様、陥し穴状遺構も多数確認され、調査区全体にわたって狩り場として利用していたことが判明した。縄文時代以外の遺構では、中世に帰属すると考えられる製鉄炉が確認された。これまでに出土した鉄滓の量から判断すると、今回調査の対象とならなかった範囲にも鉄生産にかかわる遺構が広がる可能性が高い。石峠Ⅱ遺跡の野外調査は終了したが、３カ年にわたる膨大な量の遺物の整理が今後行われる予定である。詳細な遺物の検討を行い、集落の様相を解明できるよう整理作業を進めたいと考えている。

縄文時代中期の竪穴住居跡

中世の製鉄炉

（21）間木戸（まぎど）Ⅰ遺跡

所　在　地　下閉伊郡山田町山田第３地割57ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年４月17日～８月７日
調査終了面積　2,140㎡
調 査 担 当 者　村田　淳・川又　晋・中村隼人・
高橋静歩・酒井野々子
主 要 な 時 代　縄文・古代

1：50,000　大槌

遺跡の立地

遺跡は、山田町役場の北方約1.5㎞に位置する。北西側から延びる丘陵の縁部に立地し、南東側は北から南西に流下する沢により区切られている。一昨年度からの継続調査の最終年度であり、丘陵南東隅の南向き斜面部及び尾根頂部が今年度の調査区である。遺構検出面の標高は12～34ｍである。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡103棟（縄文時代前期末～中期92棟、平安時代11棟）、土坑120基（フラスコ状土坑が主体）、縄文時代の焼土・炉40基、土器埋設遺構４基、古代のカマド状遺構１基、鉄生産関連炉１基である。調査区西側の黒色土が厚く堆積する沢状地形の範囲に竪穴住居跡、東側斜面及び尾根頂部の真砂土が露出する範囲にフラスコ状土坑が重複して構築されている。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ398箱、土師器･須恵器大コンテナ２箱、剥片石器（鏃･匙･錐等）中コンテナ７箱、礫石器（磨石･台石等）大コンテナ39箱、土製品（土偶･斧形土製品･土製円盤等）約30点、石製品（三角壕形（さんかくとうがた）石製品・石刀・玦状耳飾等）約30点、金属製品（鈴帯金具（かたいかなぐ）１・馬具１・鎌１）等である。

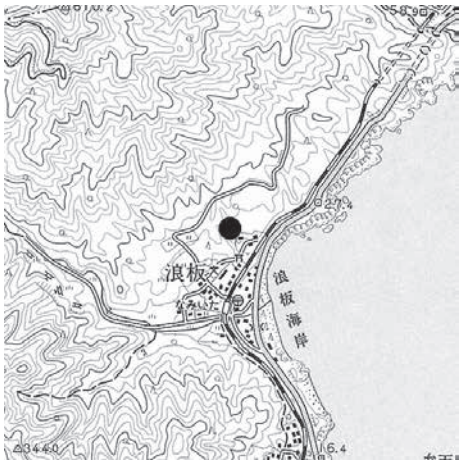
三箇年の調査で検出された遺構の総数は、竪穴住居跡約270棟（縄文時代前期末～中期約250棟、奈良～平安時代21棟）、土坑約300基、焼土・炉約60基である。また、出土遺物は縄文土器大コンテナ750箱、石器大コンテナ90箱分、土製品・石製品約200点、金属製品（釣針・鈴帯金具・馬具等）、灰釉陶器１点、常滑窯産陶器２点、動物遺存体等多量かつ多岐にわたる。遺構・遺物の検出数から縄文時代前期末～中期にかけての大規模な集落であったこと、馬具や鈴帯金具・灰釉陶器が出土していることから古代には有力者がいた集落であった可能性があることが明らかとなった。

調査区全景（南東から）

重複する竪穴住居跡（南西から）

(22) 田屋（たや）遺跡

所　在　地　上閉伊郡大槌町吉里々々第12地割字田屋９番地
委　託　者　国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年７月27日～９月４日
調査終了面積　1,800㎡
調 査 担 当 者　米田　寛・佐藤直紀・宇部めぐみ・酒井野々子
主 要 な 時 代　縄文



1：50,000　大槌

遺跡の立地

遺跡は、ＪＲ山田線旧浪板駅から北へ約500ｍの緩斜面地に位置する。遺跡背後の鯨山（標高610ｍ）から注ぐ沢流路によって形成された小支谷に数多くの集落が分布し、今回の調査区も小支谷谷底付近の緩斜面地に位置する。調査区現況は造成林であった。調査区は昨年度調査が行われた松磯遺跡に隣接している。

調査の概要

検出遺構は、土坑２基、土器埋設遺構１基である。昨年度調査で確認された製鉄関連遺構は今年度未検出であった。遺構はすべて縄文時代に属すると考えられる。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ0.5箱、磨石１点である。

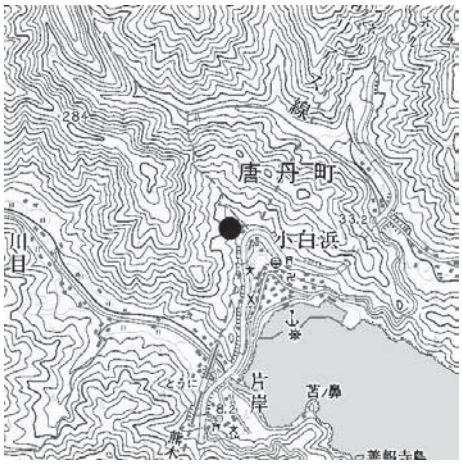
出土土器

土坑内出土土器検出状況

沢跡近景

調査区完掘（遠方に浪板海岸）

（23）小白浜（こじらはま）遺跡



1：50,000　釜石

所　在　地　釜石市唐丹町字小白浜388番地１
委　託　者　国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成27年４月16日～５月29日
調査終了面積　1,000㎡
調 査 担 当 者　米田　寛・佐藤直紀・酒井野々子
主 要 な 時 代　縄文

遺跡の立地

遺跡は、南リアス線唐丹駅から北へ約1.1㎞の斜面地に位置する。遺跡両側を背後の丘陵から続く尾根線に挟まれており、調査区北側に唐丹湾へ注ぐ沢が東流する。調査区現況は水田造成地で、２面の水田が上・下段に分かれており、特に下段の水田で地形改変が進んでいた。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡５棟、焼土１基である。調査区北端部が水田造成による削平を免れており、これらの竪穴住居跡は複式炉を有する縄文時代中期後葉の遺構と判明した。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ９箱、削器１点、剥片10点、磨製石斧１点、敲磨器１点、磨石２点、礫器１点、コハク片少量である。

調査区遠景

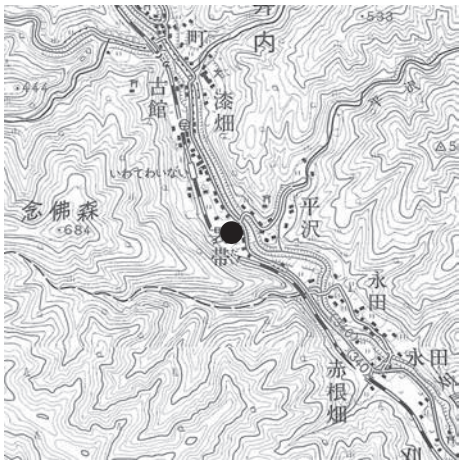
竪穴住居跡群

複式炉を有する竪穴住居跡

炉の重複する竪穴住居跡

(24) 曇帯（ほろたい）遺跡

所　在　地　宮古市和井内第23地割13-5ほか
委　託　者　沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
事　業　名　地域連携道路整備事業一般国道340号和井内
発掘調査期間　平成27年５月18日～７月28日
調査終了面積　1,600㎡
調 査 担 当 者　北田　勲・伊藤　武・近藤行仁・大坪華子
主 要 な 時 代　縄文・中世・近世



1：50,000　大川・川井

遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所新里総合事務所から北西約8.2㎞に位置しており、刈屋川によって形成された河岸段丘の西岸に立地している。現況は畑地・宅地で、標高は187～190ｍである。

調査の概要

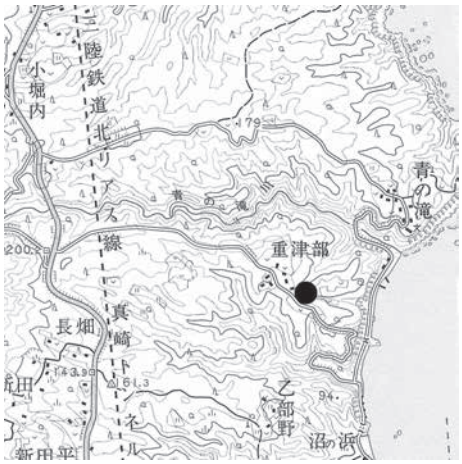
平成18年度に続き、２回目の調査である。検出遺構は、縄文時代中期後半の竪穴住居跡27棟・土坑41基・焼土２基、中世の掘立柱建物跡３棟・竪穴建物跡４棟・柱穴状土坑772個、近世の墓坑２基、出土遺物は、縄文土器大12箱・石器大４箱・土製品５点、中世の陶磁器（青磁）１点・鉄鏃２点、近世の銭貨25点・鋏１点・煙管１点である。

前回調査と同様に、縄文時代中期後半の集落が確認され、刈屋川へと下がる東側の崖付近まで遺構が密集していることが分かった。また、中世の掘立柱建物跡や竪穴建物跡が新たに検出され、中世の集落も広がっていたことが確かめられた。

調査区東側全景（南から）

（25）重津部（おもつべ）Ⅰ遺跡

所　在　地　宮古市田老字重津部北37ほか
委　託　者　沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
事　業　名　河川等災害復旧事業二級市道沼の浜
　　青の滝線沼の浜地区
発掘調査期間　平成27年８月３日～11月20日
調査終了面積　8,700㎡
調 査 担 当 者　星　雅之・高橋　工・對馬利彦
主 要 な 時 代　縄文



1：50,000　田老

遺跡の立地

遺跡は、三陸鉄道北リアス線田老駅の北北東約4㎞に位置する。周辺は谷と丘陵が複雑に入り組んだ地形で、約700m北には青の滝川が東流し、太平洋に注ぐ。調査地は、概ね東方に開く３条の谷を跨いで立地し、北側の谷にかかる部分を北調査区、中央の谷にかかる部分を中央調査区、南の谷の南向き斜面部分を南調査区とした。現況の標高は北調査区の最も高い箇所で113m、同調査区の最も低い部分で91ｍであった。調査前には山林、ないし昆布漁の作業場などとして利用されていた。

調査の概要

層序は、表土（Ⅰ層）の下に３枚の古土壌（Ⅱ～Ⅳ層）と草木根による攪乱層（Ⅴ層）が存在し、その下が地山（Ⅵ層）であった。Ⅱ・Ⅳ層は暗色帯を形成し、Ⅲ層中には十和田中掫テフラが偽礫状に堆積した箇所が認められた。

検出遺構は、竪穴住居跡７棟、竪穴住居状遺構２棟、土坑６基、陥し穴状遺構１基、焼土５基、及び沢跡、遺物包含層を検出した。これらの遺構は、主に中央調査区の南向き斜面下部に当るⅣ・Ⅴ層上面で検出した。竪穴住居跡には、縄文前期前葉の大形住居跡が含まれる。

出土遺物は、土器が大コンテナで10箱分、石器類が同22箱分、土製品数点である。土器は、縄文前期前葉を主体に、前期後葉、中期初頭、後期初頭が少量と土師器数点である。これらは、中央調査区南斜面に形成された遺物包含層（主にⅢ～Ⅴ層）及び竪穴住居跡、沢跡などから出土した。

中央調査区全景

縄文前期大型住居跡全景

（26）田鎖（たくさり）遺跡

所　在　地　宮古市田鎖第２地割120-12ほか
委　託　者　沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
事　業　名　宮古西道路建設事業
発掘調査期間　平成27年４月９日～６月30日
調査終了面積　4,830㎡
調 査 担 当 者　福島正和・宮内勝巳・舩渡耕己・箕輪匠太
主 要 な 時 代　縄文・中世・近世

1：50,000　宮古

遺跡の立地

遺跡はＪＲ山田線千徳駅の南西約1.5㎞の低位段丘面に立地する。遺跡は東向きの緩斜面地となっており、標高は８～11ｍである。標高の高い調査区西側はさらに西側の尾根に続き、標高の低い調査区東側は低湿地となっている。調査前は宅地および畑・水田として利用されていた。市道田鎖花輪線を挟んで東側には田鎖車堂前遺跡、西側の隣接する丘陵は田鎖館跡である。

調査の概要

今回の調査では縄文時代、古代～近世の遺構を検出した。縄文時代の遺構は陥し穴状遺構８基・フラスコ状土坑１基・磨石集積遺構１基・遺物包含層１箇所、古代の遺構は掘立柱建物跡１棟・溝跡１条、中～近世の遺構は掘立柱建物跡３棟・井戸跡２基・暗渠跡１条・溝跡５条を検出した。時期不明の遺構として土坑20基、柱穴状土坑600個、性格不明遺構１基を調査した。

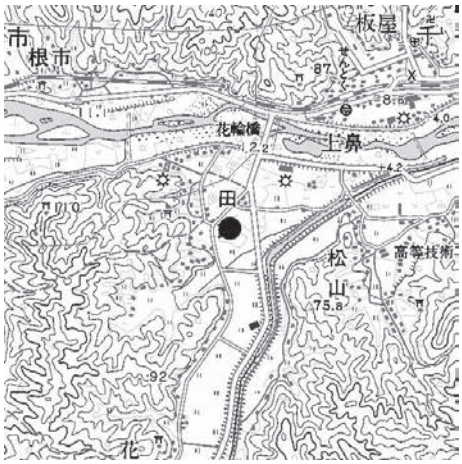
出土遺物は縄文土器（中期）大コンテナ２箱・石器中コンテナ１箱、土師器および須恵器小コンテナ0.5箱、中～近世陶磁器類中コンテナ１箱、銭貨５枚、金属製品小コンテナ0.5箱である。

発掘調査によって田鎖遺跡では、縄文時代中期以降と考えられる陥し穴状遺構が散在することから、当時は狩猟場として利用されていたと考えられる。縄文時代のフラスコ状土坑や遺物包含層の存在は、居住域が近在することを示唆するものである。古代は掘立柱建物跡が存在し、土器も一定量出土することから隣接する田鎖車堂前遺跡の集落との関連を考える必要がある。中～近世には掘立柱建物跡を検出し、大半が近世の建物であると考えられるが、１棟のみは中世後期に帰属する可能性が考えられ、隣接する田鎖館跡との関連が想起される。

遺跡全景写真

磨石集積遺構写真

（27）田鎖車堂前遺跡（たくさりくるまどうまえ）



1：50,000　宮古

所　在　地　宮古市田鎖第11地割56-2ほか
委　託　者　沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
事　業　名　宮古西道路建設事業
発掘調査期間　平成27年４月９日～12月22日
調査終了面積　9,100㎡
調 査 担 当 者　福島正和・宮内勝巳・舩渡耕己・箕輪匠太
主 要 な 時 代　縄文・古代・12世紀・近世

遺跡の立地

遺跡はJR山田線千徳駅の南西約1.5㎞の閉伊川とその支流である長沢川によって開析された平野部に位置する。遺跡の標高は６m前後であり、周囲は水田域であるが、調査した地点はその中でも微高地に立地しており、調査前は畑地や宅地が広がっていた。市道田鎖花輪線を挟んで西側は田鎖遺跡が隣接する。昨年度未了範囲を含む調査をおこない、今年度未了範囲は次年度に繰り越すこととなった。

調査の概要

今回の調査範囲は東西２箇所に分かれており、西側調査区で縄文時代中期の遺構を検出した。遺構は竪穴住居跡１棟・フラスコ状土坑１基・遺物包含層１箇所である。昨年度から連続する東側調査区では古代～近世の遺構を検出した。古代の遺構は竪穴住居跡41棟・土坑25基・祭祀遺構１基を調査した。竪穴住居跡は７～10世紀前半までであるが、９世紀代が主体である。12世紀と考えられる遺構は竪穴建物３棟・堀１条・溝15条である。堀は未調査範囲を挟んで東側調査区、西側調査区ともに検出し、同一のものであると考えられる。３棟の竪穴建物は堀内区にあり、古代の竪穴住居跡とは出土遺物および形態等に違いが認められる。近世は掘立柱建物跡を４棟・柱穴195個を検出した。井戸状遺構２基を調査したが、時代は不明である。

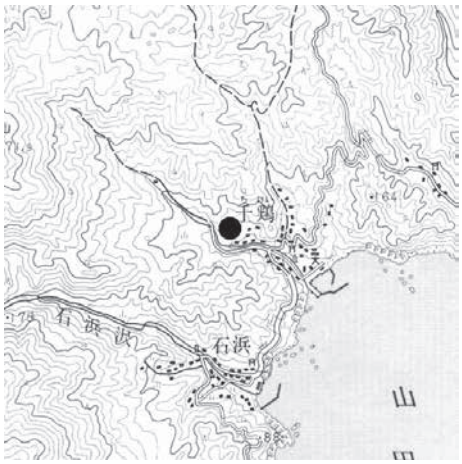
出土遺物は縄文土器（中期）大コンテナ５箱・石器中コンテナ１箱、土師器および須恵器大コンテナ14箱、中～近世陶磁器類中コンテナ１箱、銭貨20枚、金属製品小コンテナ１箱である。また、灰釉陶器片２点・石製紡錘車１点・土製紡錘車５点・頁岩製管玉２点・平瓦片１点・鉄滓小コンテナ0.5箱も出土している。

昨年度から継続して調査をおこなっている田鎖車堂前遺跡は、古代から閉伊地方の拠点的な集落として存在し、平泉藤原氏の時代である12世紀に再び地域支配の重要拠点となったものと考えられる。

航空写真（写真上が北）

(28) 千鶏(ちけい)Ⅳ遺跡

所　在　地　宮古市重茂第12地割33ほか
委　託　者　沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
事　業　名　地域連携道路整備事業主要地方道重茂半島線
発掘調査期間　平成27年４月９日～７月30日
調査終了面積　8,400㎡
調 査 担 当 者　杉沢昭太郎・藤原雅仁・澤　美咲・白戸このみ
主 要 な 時 代　縄文・平安



1：50,000　宮古

遺跡の立地

遺跡はＪＲ東日本宮古駅から南東に16㎞、宮古市立重茂小学校の南側約４㎞に位置している。千鶏神社の西側にある緩斜面及びその北側の山林が本遺跡にあたる。昨年度は緩斜面を、今年度は主に山林部分を調査し山の中腹から山裾にかけて遺構・遺物が分布していた。

調査の概要

検出された縄文時代中期後半の遺構には竪穴住居跡７棟、フラスコ状土坑15基、焼土２基、溝跡１条、捨て場１箇所がある。平安時代の遺構としては竪穴住居跡が１棟、焼土４基が検出された。中世およびそれ以降のものとしては竪穴建物跡が１棟、焼成遺構が１基、墓壙１基、柱穴状土坑10個がある。

縄文時代中期後葉頃には山裾部を中心に竪穴住居跡が広がり、山の中腹部分には貯蔵穴がまとまって確認された。山裾部より下の旧沢跡には小規模ながら捨て場が形成されていた。

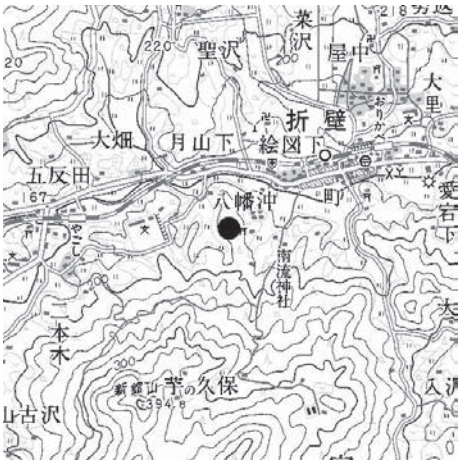
山裾にある平安時代の竪穴住居跡、山の中腹にある中世の竪穴建物跡は何れも残りが悪かった。鉄生産に関連するような遺物は出土していない。

出土遺物は、縄文土器が５箱、石器類が12箱、平安時代の土師器が0.1箱、近世の銭貨が６点である。

縄文時代中期の竪穴住居跡

（29）八幡沖（はちまんおき）遺跡

所　在　地　一関市室根町折壁字向山61番地１ほか
委　託　者　県南広域振興局土木部一関土木センター
事　業　名　地域連携道路整備事業折壁地区室根バイパス
発掘調査期間　平成27年７月１日～11月26日
調査終了面積　8,313㎡
調 査 担 当 者　小林弘卓・近藤行仁・藤本玲子・鈴木貞行・清水　彩・佐藤奈津季・宇部めぐみ
主 要 な 時 代　縄文・中世・近世



1：50,000　千厩

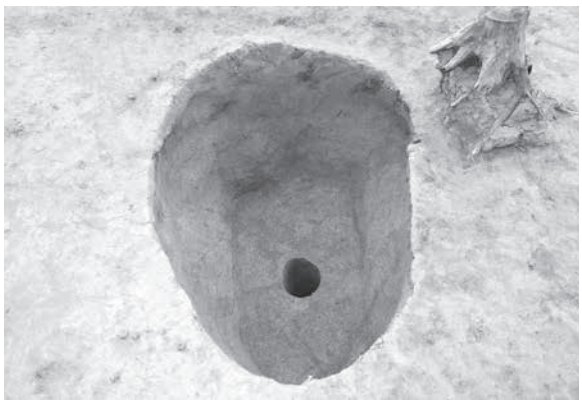
遺跡の立地

遺跡は、ＪＲ東日本折壁駅から約１㎞南西に位置し、矢越山と新館山から北に張り出す細長い尾根上に立地している。この尾根は町内を東流する大川の近くまで張り出しており、当該地域である折壁地区を一望することができる。大川や国道284号線（気仙沼街道）を挟んだ北側には室根山がそびえ、その麓には既知の金鶏城が存在する。調査区の標高は172～191ｍで、現況は山林・畑地である。

調査の概要

昨年度からの継続調査である。今年度の調査区は、遺跡全体の西側の尾根上と中央部の低位部分にあたる。検出遺構は、陥し穴状遺構27基、土坑９基、焼土１基、溝跡３条、堀跡３条（昨年度からの続き）で、堀跡以外はいずれも西側の尾根上で確認されたものである。出土遺物は、石器１点、近世陶磁器十数点である。

陥し穴状遺構や土坑の大半は、尾根の頂部から南側に下る斜面部で検出されている。陥し穴状遺構は小判形や溝状のものが確認でき、底面に逆茂木痕を残すものがほとんどである。これらは尾根上全体に分布するものの、西側においてはまとまって併存している。いずれも縄文時代に属するものと考えられ、計画的に配置されたことが推測される。土坑は楕円形を呈するものが多く見られる。出土遺物もないため時期の特定は困難だが、一部については形状から近世の墓壙の可能性が考えられる。この他、溝跡が調査区東西両端で確認されたが、状況的に近現代の構築の可能性が高い。低位部分にある昨年度から続く堀跡は、今年度は一部の精査にとどまったが、中世城館に伴う防御性の高いもので、最深部で約3.7ｍの深さを有する。詳細は次年度の調査によって明らかになるものと思われる。


陥し穴状遺構（北から）

堀跡（北から）

(30) 越田松長根Ⅰ遺跡（こしだまつながねいせき）

所　在　地　宮古市田老字越田79-1ほか
委　託　者　宮古市都市整備部
事　業　名　宮古市新田平乙部線道路整備事業
発掘調査期間　平成27年４月８日～７月30日
調査終了面積　4,830㎡
調 査 担 当 者　星　雅之・高橋　工・對馬利彦
主 要 な 時 代　縄文・弥生・平安

1：50,000　田老

遺跡の立地

遺跡は、三陸鉄道北リアス線田老駅の北北東約２㎞、真崎海岸から東に約２㎞に位置する。遺跡は、丘陵と谷が複雑に入り組んだ地形に立地し、標高は90～110ｍである。調査範囲は西調査区と東調査区の２か所に分かれ、西調査区は谷頭の東向き～南向きの斜面にあり現況は畑地と森林、東調査区は谷の南斜面に相当し現況は果樹園と農道である。この遺跡は､2007年に「越田遺跡」と「松長根遺跡」を統合し「越田松長根Ⅰ遺跡」となり、遺跡の範囲は南北で約750ｍ、東西で700ｍ、約400,000㎡に及ぶ。なお、今年度、東調査区の東側近接地を宮古市教育委員会が調査を実施している。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡29棟（縄文前期24棟、古代５棟)、竪穴住居状遺構１棟、土坑10基、陥し穴状遺構２基、焼土13基、柱穴状土坑32個、柱穴列２条、捨て場１箇所を検出した。縄文前期の竪穴住居跡は、初頭～前葉を主体とし、形状は方形基調で炉が認められないものが多い特徴が看取される。これらは西調査区において、十和田中掫テフラ混入層より下位から検出した。

出土遺物は、土器は大コンテナ43箱、土製品39点、石器大コンテナ18箱（約2000点)、石製品24点である。土器の主体時期は、縄文前期初頭～前葉及び中期末葉～後期前葉である。その他として、弥生中期の土器と平安時代の土師器片が数点出土している。特記事項としては、縄文時代の三角壕形土製品１点が出土した。

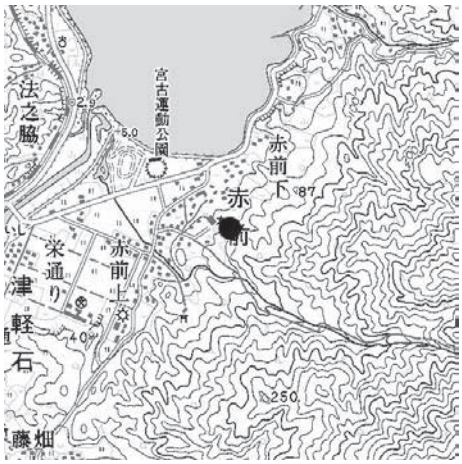
今回の調査の結果、西調査区は縄文前期初頭～前葉の集落跡、東調査区は縄文中期末葉～後期前葉の捨て場と古代の集落跡の一端が検出された。

西調査区全景

東調査区全景

（31）赤前（あかまえ）Ⅲ遺跡

所　在　地　宮古市赤前第11地割83-1ほか
委　託　者　宮古市都市整備部建設課
事　業　名　市道赤前上下線道路整備事業
発掘調査期間　平成27年８月３日～11月26日
調査終了面積　2,670㎡
調査担当者　杉沢昭太郎・藤原雅仁・澤　美咲
主要な時代　縄文・古代・近世



1：50,000　宮古

遺跡の立地

遺跡はＪＲ東日本宮古駅から南に６㎞に位置している。宮古市立赤前小学校の東隣りにある山林と、その南側の緩斜面が本遺跡にあたる。昨年度は緩斜面部を、今年度は主に山林部分を調査している。

調査の概要

緩斜面部から縄文時代中期後半の竪穴住居跡１棟、平安時代の竪穴住居跡が１棟見つかっている。山の中腹からは縄文時代のフラスコ状土坑２基、陥し穴状遺構１基、古代の炭窯跡が１基、近世の墓壙約75基が検出された。この他に時期不明の土坑が６基、柱穴状土坑６個が確認されている。

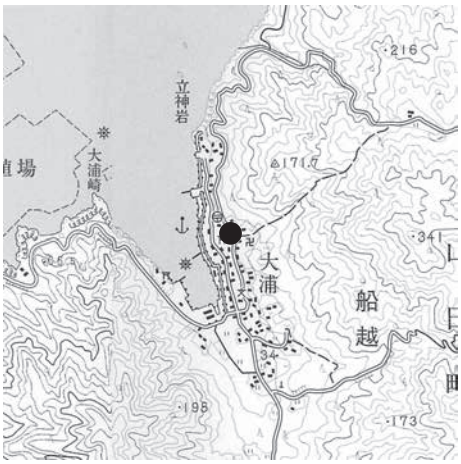
縄文時代には緩斜面部を居住域、山の斜面部は貯蔵施設や狩猟の場として使用していた。古代にも緩斜面部は集落として使用され、山の中腹部は炭を焼く空間として使われていた。そして江戸時代以降は墓地となっていたことが分かった。

出土遺物は縄文土器が0.5箱、近世墓から出土した鉄鍋・煙管・簪・鏡・銭貨などが1.5箱である。

南側調査区全景（南から）

(32) 川半（かわはん）貝塚

所　在　地　下閉伊郡山田町船越第22地割106-2ほか
委　託　者　山田町（建築住宅課）
事　業　名　町営災害公営住宅建設事業
発掘調査期間　平成27年７月１日～10月23日
調査終了面積　5,000㎡
調 査 担 当 者　須原　拓・佐藤直紀・澤目雄大
主 要 な 時 代　縄文



1：50,000　陸中山田

遺跡の立地

遺跡は船越半島の北西側、山田湾から約200ｍに位置する。西向き斜面地に立地し、標高は24～31ｍである（左下写真）。元々、東側の山地から続くやや急な斜面地であったと推測するが昭和の田畑造成による土地改変の影響で、調査地の広い範囲で地形ごと削平されていた。

調査の概要

検出遺構は縄文時代前期初頭～前葉の竪穴住居跡２棟、竪穴住居状遺構１棟、中期後葉～末葉の竪穴住居跡４棟、前期・中期の土坑５基、焼土３箇所であり、他に近世墓４基を確認した。概ね調査区中央の緩やかな斜面地に分布する。前期の竪穴住居跡は非常に残りが悪く、床面の一部と地床炉、柱穴を検出したにすぎない。残存する床面の規模や複数の地床炉が一列に並んでいることから、２棟とも８ｍを超える大型住居であろうと推測する。中期の竪穴住居跡は前期の住居よりも高い場所に分布する。４棟全て重複しており、同時期存在ではない。いずれの住居も斜面地の崩落により遺構上部は消失しているため、前期同様、残りは良くないが、付属する複式炉や埋設土器、柱穴を確認した（右下写真）。

出土遺物は縄文土器が大コンテナ６箱（前期～中期）、石器大コンテナ４.5箱で、他に銭貨（寛永通宝）や近世陶磁器片がわずかに見つかっている。遺物は上記遺構に伴うものの他に、調査区南北両端の沢跡からも出土している。沢跡は山側から海側へと延びているが、特に傾斜が緩やかになる調査区西端で比較的多量の遺物が出土している。出土遺物の時期は上記の遺構群と同じものが主体で、他に中期初頭～中葉の土器も見受けられ、やや時期幅が広い。

今回の調査では「貝塚」としての性格を明らかにすることはできなかったが、同地に縄文時代前期と中期の小規模集落が展開していたことが分かった点は意義があったと考えられる。

調査区全景（南東から）

縄文時代中期の竪穴住居跡（西から）

（33）ククイ井遺跡

1：50,000　陸中山田

所　在　地　下閉伊郡山田町船越第10地割4-4ほか
委　託　者　山田町建設課
事　業　名　防災集団移転促進事業
発掘調査期間　平成27年４月６日～７月15日
調査終了面積　4,800㎡
調 査 担 当 者　須原　拓・光井文行・澤目雄大
主 要 な 時 代　縄文・平安

遺跡の立地

遺跡は船越半島の西側、船越湾から約500ｍに位置する。丘陵末端頂部の平坦面、またそれに続く南向き斜面下方に立地し、標高は22～32ｍである。調査前は杉林で、現代の造成の影響で調査区内の一部は削平されていた。

調査の概要

縄文時代の検出遺構は斜面地からその下方に分布し、前期後葉（大木５式期）の竪穴住居跡４棟、中期後葉（大木８ａ式期）の竪穴住居跡１棟、前期･中期の土坑16基である。前期は大型住居であり、写真の１棟は南側の一部を消失しているが、全長12ｍを測り、２回以上の拡張が行われたものと推測される。床面には長辺方向に炉（地床炉）が並び、また200個以上の柱穴が付属する。中期の竪穴住居跡は平面形が不整な円形で石囲炉が付く。ほかに前期を中心とした包含層１箇所を調査区南端の最も低い範囲で検出した。出土遺物は縄文土器が大コンテナ9.5箱（前期主体。他に中期が含まれる）、石器大コンテナ３箱で、石製の玦状耳飾り５点も見つかっている。

古代の検出遺構は北側の最も高い丘陵頂部から斜面に分布し、平安時代の竪穴住居跡３棟、鍛冶工房跡５棟、土坑14基を検出した。竪穴住居跡にはカマドとは別に、床面中央付近が焼けている（焼土が残っている）ことが多く、居住施設というより工房跡と同様の機能をもった施設と推測される。鍛冶工房跡は横長の長方形を呈し､床面には複数基の鍛冶炉が付属する｡鍛冶炉には底面に碗型滓が残っていたものも見受けられた（右下写真)。出土遺物は土師器、須恵器、羽口が大コンテナ1.5箱分であり、ほかに鉄製品（鉄斧など)、鉄滓大コンテナ１箱がある。

他に近世以降の土坑２基やわずかだが近世陶磁器片が出土している。

縄文時代前期の大型住居（南から）

平安時代の鍛冶炉（東から）

(34) 赤浜（あかはま）Ⅱ遺跡

所　在　地　上閉伊郡大槌町赤浜１丁目112番地２ほか
委　託　者　大槌町教育委員会
事　業　名　土地区画整備事業赤浜地区
発掘調査期間　平成27年４月６日～７月31日
調査終了面積　3,495㎡
調査担当者　小林弘卓・米田　寛・藤本玲子・野中裕貴
鈴木貞行・佐藤直紀・南野龍太郎・
宇部めぐみ
主要な時代　縄文

1：50,000　大槌

遺跡の立地

遺跡は、大槌町役場から東へ約３㎞の地点に位置する。標高０～８ｍの大槌湾へと繋がる緩やかな南向きの斜面裾に立地しており、南方には「ひょっこりひょうたん島」で有名な蓬莱島を臨む。遺跡の現況は宅地・小学校であったが、遺跡の所在する赤浜地区は東日本大震災により甚大な被害を受けた区域であり、建物はすべて損壊・撤去されている状況である。

調査の概要

昨年度から引き続き調査を行った。検出遺構は、竪穴住居跡48棟、土坑18基、炉跡２基、焼土32基、土器埋設遺構２基、配石遺構５基、遺物包含層２面（縄文前期・後期）である。出土遺物は、縄文土器大コンテナ111箱、石器類大コンテナ23箱、土偶約20点などである。これらはいずれも縄文時代に属するが、時期ごとの調査区内での分布が比較的顕著で、低位部分に後期、中位に中期、高位に前期のものが見られる。

後期中葉では配石遺構が確認されている。全体を俯瞰すると列状を形成し、一部では巨大な立石が用いられている。また、南東部分においては段状に石が組み置かれている部分も確認された。この周辺には、外周に石を巡らした竪穴住居跡も見つかっており、何らかの祭祀的な機能が推察される。中期では石囲炉を伴う竪穴住居跡が多数見つかっており、中葉～後葉の大規模な集落跡であったと考えられる。前期では大形の竪穴住居跡（ロングハウス）が数棟検出されており、このうちの１棟は中掫火山灰で覆われていた。前葉～中葉に集落が営まれていたことが窺える。

配石遺構（南東から）

竪穴住居跡（東から）

（35）西和野（にしわの）Ⅰ遺跡

所　在　地　陸前高田市高田町字鳴石50ほか
委　託　者　陸前高田市都市整備局市街地整備課
事　業　名　土地区画整理事業高台Ⅳ
発掘調査期間　平成27年４月７日～５月８日
調査終了面積　12,775㎡
調査担当者　野中裕貴・村木　敬・佐々木あゆみ・藤田崇志・南野龍太郎
主要な時代　弥生・古代

1：50,000　盛

遺跡の立地

遺跡は、陸前高田市役所仮庁舎の北東約600mに位置し、氷上山より南へ延びる丘陵上に立地している。標高は約75～90mで、北側の平坦面から南側に向けて傾斜する地形となっている。調査前の現況は山林であった。

調査の概要

検出遺構は、奈良～平安時代の方形周溝１基、土坑８基である。方形周溝は周溝部分のみを確認するに至った。土坑は底部より多量の炭化物が出土していることと底部から壁面にかけて被熱痕のあることから木炭窯跡と判断している。これらの遺構は北側の頭頂部にのみ存在している。一方、南側の斜面部は試掘トレンチを密に設けた結果、遺構の存在が確認できなかった。

出土遺物は、石鏃、弥生時代終末期の土器、土師器、続縄文系の後北C_2・D式などがあり、すべて含めて小コンテナ１箱分である。続縄文の存在から、他地域との交流を窺い知ることができる。

遺跡遠景

（36）高田城跡（たかだじょうあと）

所　在　地　陸前高田市高田町字洞の沢、鳴石、本丸地内
委　託　者　陸前高田市都市整備局市街地整備課
事　業　名　土地区画整理事業高田西地区
発掘調査期間　平成27年５月11日～９月30日
調査終了面積　22,000㎡
調 査 担 当 者　村木　敬・野中裕貴・佐々木あゆみ・南野龍太郎・藤田崇志
主 要 な 時 代　中世

1：50,000　盛

遺跡の立地

遺跡は陸前高田市役所の南東約900m、氷上山より南へ延びる丘陵上に位置する。標高は45～55m前後で南側の眼下に広田湾を望む立地である。調査前の現況は山林である。

調査の概要

今年度は曲輪ⅢとⅣを対象に調査を行った。曲輪Ⅲは近代以降の造成であり城館の痕跡が認められなかった。曲輪Ⅳでは曲輪７箇所、切岸７箇所、土塁２基、土坑１基を検出している。

出土遺物は近世陶磁器を中心に、縄文土器や土師器などが少量認められている。

城館は、従来考えられていた範囲より狭くなることが判明した。特に曲輪Ⅲについては頭頂部のみに範囲が限られるものと考えられる。ただし、使用された時期については、昨年同様、判断できる遺物が少なく不明である。

遺跡遠景

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいせいにじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成27年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第661集
編著者名	村木　敬
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL（019）638－9001
発行年月日	西暦　2016年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
サンニヤ遺跡	岩手県九戸郡洋野町種市第25地割	03507	IF48-2118	40度24分41秒	141度42分01秒	2015. 10. 05 ～ 2015. 11. 11	1,800㎡	三陸沿岸道路

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
サンニヤ遺跡	狩猟場	縄文時代	陥し穴状遺構　20基	縄文土器片	

要約	遺跡からは溝状の陥し穴が20基検出された。遺構は北側を流れる川尻川へ向かって張り出した段丘上の先端部より内陸部の緩斜面上に形成されている。遺構の平面形状、堆積土や出土遺物などから縄文時代中期に形成された狩猟場と考えられる。

※緯度、経度は世界測地系による数値である。

ふりがな	へいせいにじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成27年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第661集
編著者名	阿部勝則　光井文行　中村隼人　高橋静歩
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL（019）638－9001
発行年月日	西暦　2016年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
房の沢Ⅳ遺跡	岩手県下閉伊郡山田町山田第14地割ほか	03482	LG94-0050	39度28分49秒	141度56分56秒	2015. 07. 21 ～ 2015. 10. 09	2,370㎡	三陸沿岸道路

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
房の沢Ⅳ遺跡	集落	縄文時代 古代 近世	竪穴住居跡　１棟 土坑　２基 陥し穴状遺構　１基	縄文土器・土師器・須恵器・石器・刀子・山刀・鉄製紡錘車	奈良時代末以降の竪穴住居跡が検出された。今回の調査区内では古墳は確認されなかった。

要約	前回調査では古墳及び馬墓が検出されたが、今回の調査では確認されなかった。ただし奈良時代末以降の成立を考えることができる竪穴住居跡が検出されており、調査区外の尾根筋に沿って同時代の竪穴住居跡が展開する可能性がある。特徴的な出土遺物としては県内では宮古山田地区に限定して出土事例を確認できる刀身に強い反りのある刀子と、近世アイヌマキリに類似する厚手の山刀を挙げることができる。

※緯度、経度は世界測地系による数値である。

ふりがな	へいせいにじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成27年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第661集
編著者名	米田　寛
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL（019）638－9001
発行年月日	西暦　2016年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
白石遺跡（しろいしいせき）	岩手県上閉伊郡大槌町吉里々々第９地割地内（いわてけんかみへいぐんおおつちちょうきりきりだいちわりちない）	03461	MG23-1279	39度 23分 06秒	141度 55分 54秒	2015. 07. 06 ～ 2015. 07. 24	550㎡	三陸沿岸道路

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白石遺跡	集落	不明	溝跡　１条		

要約	遺跡登録は縄文時代後期であるが、今回の調査範囲ではその痕跡を確認できなかった。溝跡１条を検出したが、鯨山から注ぐ沢跡の可能性が考えられる。しかし、調査範囲が狭く暫定的に溝として報告する。今後、周辺の調査が進展すれば、遺跡・遺構の性格がより明確になっていくであろう。

※緯度、経度は世界測地系による数値である。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集

平成27年度発掘調査報告書

印　刷　　平成28年３月16日
発　行　　平成28年３月25日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　（019）638－9001
ＦＡＸ　（019）638－8563
発　行　（公財）岩手県文化振興事業団
〒020－0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電　話　（019）654－2235
ＦＡＸ　（019）625－3595
印　刷　川口印刷工業 株式会社
〒020－0841　岩手県盛岡市羽場10-１-２
電　話　（019）632－2211
ＦＡＸ　（019）632－2217

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2016